94
112

訂校併露田幸
著右淮興道著行光源

海道記 廻國雜記

東京
古典文庫刊行會

94-112

源光行著
道興准后著
幸田露伴校訂

海道記
廻國雜記

名著文庫
東京合資會社冨山房発兌

45. 3. 30
内交

四哲の言に「肉體を養ふには食を以てし、精神を養ふには書を以てす」と云へり。就中文學は慰安の源泉、理想の糧餌にして、社會個人の文明的生活に大關係を有するもの、文學なき人は花實なき草木の如く、文學無き社會は公園なき都府に似たりといはんか。明治の洪業こゝに三十六の春を重ねて、外形著々整備すと雖も、精神上の開拓惜むらくは之に伴はず、所謂佛作つて魂を入れざるの憾あり。乃ち高尚なる娯樂、健全なる文學を一般の家

庭に注入して徐に之を夢かんの意、我が先達の間に急にして此の叢書を成しぬ。收むる所戯曲、小説、詩歌の純文學より史傳、紀行、隨筆、雜論に至るまで、皆愼密なる鑑査の篩を經て、一として國文學の精英ならずといふこと無し。庶幾くは社會の乾燥を醫する清爽の水たるを得んかの刻成るに臨み、校訂者に代りて聊か其の意を述ぶ。

明治癸卯三月

富山房編輯局

海道記一篇、或は謂つて鴨長明の作るところと爲す。誤るのみ。實に源光行これを記す。光行は右兵衞尉源季遠の三男なり、正五位下河内守兼大監物に叙任す。歌才あり、文藻あり、よつて後鳥羽上皇の寵を被る。承久の役の起る、上皇の意に出づ。乃ち光行また從つて官軍に在り。戰利あらず、上皇北條義時のために幽せらるゝに及び、公卿の事に參する者、多く戮せらる。光行亦危し。職微にして位卑しと雖も、上皇の爲に北條氏を討ずる宣旨副文を草するを以て、深く北條氏の惡むところとなるなり。其年八月二日、光行終に清久五郎行盛の押送する所となつて、相州金洗澤に至る。金洗澤は蓋し鎌倉氏の時の刑場なり。將に斬られんとす。光行の男親行、

仕へて鎌倉に在り、悲泣して赦を乞ふ。義時聽かず。伊豫中將の親行の爲めに言ふに及び、義時纔に死を赦すの令を與ふ。親行狂喜、令を帶び馬を馳せて之を救ふ、幸に死せざるを得たり。光行赦されて京に歸るの後三年、復鎌倉に到る。海道記は即ち當時の行を記す。實に貞應二年四月也。こゝを以て世或は呼んで貞應記行といふ。光行の一身、經歷是の如し、足の履み目の矚るところの山水、或は同人の及に死し、或は失離の水に投ずる所たり、文おのづから悲咽の氣と感傷の辭多き所以なり。而して其の宏才博學なる、筆墨自在にして、針線巧妙に、駢儷の體を以て俯仰の懷を叙す。是の如きの文系に於て、殆と古今の一人たりといふ可し。舊刊諸本爛脫甚

だ多く、訛舛通じ難し。今これを校するに當つて、吾が及ぶ所を竭して、誤を正し闕を示す。讀む者此を舊本に比して孟浪に事を做すと云ふ勿れ。

回國雜記一部、俗本誤つて宗祇回國雜記と題す。印本五卷、元祿十四年宗祇二百年忌に際して法源杜多の刊する所なり。本居宣長其の著すところの玉勝間卷五江戸の地名これかれの條に宗祇法師が回國雜記と記するもの、又偶々誤るのみ。其の誤の由つて來るところを考ふるに、蓋し法源宗祇自筆の模寫本を得て、漫に認めて宗祇の記するところと爲し、これを宗祇追善の資とするに起る。俗本卷首附するところの法源の文に徵して知るべき也。關岡野洲良おもへらく、白川古事考

に記す、陸奥國白河郡矢槻里大善院、道興准后の白河入道に贈るところの書を藏すと。又武藏十玉坊に准后の賞賜するところの狀を藏す。事皆雜記の文と符合す　記事載するところ近衛前關白の信を寄する。越後の上杉氏の迎へ侯する、甲斐の武田氏の參趨する、皆ささに宗祇輩の事たらざるべきを見る。則ち知る是必らず宗祇の記するとろに係らずして、實に道興准后の筆に成るを。と野洲良の言當れり。雜記の文越中岩藏川に臨みて故鄕長谷に近き同名の川を憶ふの辭ありて和歌一章を附す。又記の首章、長谷の遂華を出づるの句あり。長谷は即ち山城愛岩郡長谷にして聖護院山莊の在る處、長谷川は即ち岩藏川なり。宗祇は叡山に住するあつて長谷に住す

るあらず。然らば則ち回國雜記の聖護院道興准后の筆に成る、また自から知るべきのみ。道興准后は關白近衛房嗣の第三子、聖護院門跡たり。聖護院は修驗道を總管す。記中修驗者の事多く出づるはこれが爲なり。准后歌を能くし詩を作る、應仁亂後の世に在つては、蓋し稀有に屬す。雜記の文、修めず飾らずと雖も、淡々の中に味有り、楚々の中に情あり、且又古を考へ往を知るに於て、頗る稗益あり。愛す可きの什といふ可し。准后記を爲すの時、歳蓋し六十前後。宗祇また六十五六歳、法源の誤を爲すも故無しとせざる也。

明治辛亥晩秋　　露伴識

海道記

源光行

白河のわたり中山の麓に、閑素幽栖の佗士あり。性器に底なければ、能をひろひ藝をいるゝに、□□□□たまるべからず。身運は本より薄ければ、報をはぢ命を顧みて、恨を重ぬるに所なし。徒に貧泉の蝦蟇となりて、身を藻によせて力なき音をのみ啼き、空しく窮谷の埋木として、意□樹に□□□花絶えたり。惜からぬ命のさすがに惜ければ、投身の淵は胸の底に淺く、存ずるかひなき心は、なまじひに存じたれば、斷腸の棘は愁の中に茂る。春は蕨を折りて臨める飢をさゝふ。伯夷が賢にあらざれば人もとがめず。秋は菓を拾て貧き病をいやす。美子が

藥もいまだ飢たるをば治せず。九夏三伏の汗は拭ひて苦しまず、手中に扇あれば、涼を招くにいとやすく、玄冬素雪の嵐は凌ぐに能はず、身のうへに衣なければ、寒をふせぐにすべなし。窓の螢も集めざれば目は暗きが如し。何を見てか、志をやしなはん。樽の酒も酌む事を得ざれば、心は常に醒々たり。いかゞ憂を忘れんや。然る間、歳の水早く流れて、生涯はくづれなんとす。留むとすれども留まらず。五旬の齡の流れ、車坂に下る。朝に馳せ暮に馳す。日月の廻りの駿駒隙間□□、鏡の影に對居て、知らぬ翁に恥ぢ、鍬子を取て白絲をあはれむ。是れにより て佛のうへには齡をおどろかす老をつげ、鶴髮のほとりに早落をいふ。露におどろき霜を厭ふこゝろざし忽に催して、僧を學び佛に歸する念やうやくにおこる。名利は身に棄てつ。稠林に

花ちりなば、學樹の菓は熟するを期すべし。薜蘿は肩にすがる。法衣の色染みなば、衣の裏の珠は悟る事を得つべし。旦暮の露の身は、山かげの草をおき處とすれども、朝霞は望絶えて天を仰ぐに空し。世を厭ふ道は貧道より出でたれども、佛を念ずる思ひは遺怠とおこたる。四聖の無爲を契りしも、一聖猶頭陀の道にとゞまりき。ひとへに己が有爲をいとひ貪り、己いよ〳〵坐禪の窓にいそがし。然而曹腊が酒も人を醉して□□□□よしなし。子罕が賄は心に賄て身の樂みとせり。鵝眼なけれど、天命の路に杖つきて歩みをたすく。齧牙はかけたれども、地恩の水に口すゝぎて渴をうるるほす。空腹に一盃の粥をすゝれば餘味あり。海紙百綴の衿、寒に服すれば肌を暖むるに足れり。檜笠をかぶり裝とす、出家の身なり。藁沓をふんで駕とす、遁世

の道なり。そも〳〵相模國鎌倉の郡は、下界の鹿澁苑、天朝の築渦州なり。武將の林をなす、萬榮の花萬にひらけ、勇士道に榮えたり。百歩の柳百たび中る、弓は曉月に似たり。一張そばだちて胸に撓り、劒は秋の霜の如し、三尺たれて腰すゞし。勝鬪の一陣には爪を楯にして仇を雌伏し、猛豪手にしたがへて直に雄稱す。干戈威をいつくしくして、梟鳥敢てかけらず。誅戮ロにきびしくして、虎ロおそれをます。四海の潮の音は、東日に照されて浪を澄せり。貴賤臣妾の往還する多く、驛のみち隣をしめ、朝儀國務の理亂は、萬緒の機かた〳〵に織り、去年質耳外に聞をなして、おほくの歳をわたり、舌端唇ロロして、いくばくの日をか送るや。心の船ようにに漕ぎ、未だ海道萬里の波に棹さゝず。乘馬あらましに馳す、いまだ關山千程の雲にむ

ちうたず。今便人の芳緣に乘じて、俄に獨身の遠行を企てり。貞應二年卯月の上旬、五更に都を出で一朝に旅立つ。昨日はすみわびて、厭はしかりし宿なれども、今立別るれば名殘をしく覺えて、しばしやすらへども、鐘の聲明けゆけばロロロロあへずして、いつまた粟田口の堀道を南にかいたどりて、相坂山にかゝれば、九重の寶塔は北の方にかくれ、又相坂を下るに松をともして過行けば、四宮河原のわたりは清旦に通りぬ。小關をうち越て、大津の浦をさして行く。關守の門をだに顧れば、金剛力士忿怒のいかり眼を驚かし、勢田の橋を東にわたれば、白浪瀧落ちて流眄とながれ又身をひやす。湖上に船をのぞめば心興にのり。野庭に馬をいさめて手に鞭をかなづ。漸くに行くほどに、都をはるかに隔てぬ。前途林幽なる、纔に青薺梢にみゆ。後路

山隔りて、□□白雲路をうづむ。既に斜陽影くれて、暗雨しきりに笠にかゝる。袖をしぼりて。はじめて旅のあはれを知りぬ。其間山館に臥して。露□より起きてまた露より起く。曉の望蕭々たり。煙高卑、千巖の路をうづみ、□□□□□□、水に臨みてまた水に臨む。□□□□□□。波の淺深、長堤の汀にすゝむ。濱名の橋の橋下には。往事をちかひてこゝろざしをのべ。清見が關の關屋には、あかぬ名殘をとゞめて、歩みをはこぶ。富士の高根に煙を望めば、臘雪宿して雲ひとりむすび、宇津の山路に蘿を尋ぬれば、むかしの跡夢にして風の音おどろかす。木々の下には。下ごとに翠帳をたれて、行客の苦みを憩へ、夜夜の泊りには、とまり毎にこも枕をむすびて、旅人の眠りをたすく。行々として重ねて行々たり、山水野塘の興こそ觀を增し、

歷々として更に歷々たり、海村林邑の感いやめづらかなり。此道若四道の間に逸興の勝れたるを、かね□又孤身が旅□抖擻のはじめなれば、遇□たる舊客、猶眺望をなほざりにせず。況や一生の新賓なれば、感思おさへがたし。感思の中に愁傷の交はる事あり。所謂母儀の老を□、又いとけなきを都にとゞめて、不定の再觀をちぎり置く。無狀かな愚子が爲躰。浮雲に身を乘せて旅の天にまよひ、朝露の命にて風のたよりにたゞよふ、道を同うするものは、我を知らざる客なり。語は親昵に契りて。いづちか離れなんとする。長途に疲れて十日あまり、窮屈しきりに身をせむ。湯井の濱にいたりて一時半偃息、しばらく心をゆるぶ。時に蓴實にしづむ。舊里を忍びて後會を期し、桂花東にひらけ、外鄉に向つて中懷を惱ます。仍三十一字を綴りて、

千度思ひ萬度懐ひて、旅のこゝろざしをのぶ。此は是文を以てさきとせず、歌を以て本とせず、たゞ興にひかれて、物のあはれを記するのみなり。

四月四日の曉。都出し朝より雨にあひて、勢田の橋のこなたにしばらくとまりて、雨じたくしてゆく。今日明日ともしらぬ老人を、ひとり思ひおきてゆけば、

おもひおく人にあふみのちぎりあらば今かへりこん勢田の長橋

橋のわたりより雨まさりて、野徑の道芝露殊に深く、八町畷を過れば、行人たがひに身をそばめ、一邑の里通れば、亭犬頻に形をほゆ。今日しもならはぬ旅の空に、雨さへいたく降りて、いつしか心のうちもかき曇るやうに覺えて、

たびごろもまだ着もなれぬ袖のうへにぬるゞきものと雨はふりきぬ

田中打ち過ぎ、民宅打過ぎて、はるゞと行けば、農夫並び立てあら田をうつ。聲は行雁の啼きわたるが如し。卑女うちむれ前田の面にゑぐつむ。□水□しづくに袖をぬらす。そともの小川には、河ぞひ柳に風たちて、鷺の蓑毛うちなびき、竹の編戸の垣根には、卯花咲きすさびて、山時鳥忍びなく。かくて三上の嶽を眺みて、野州河をわたる。

いかにしてすむやす川の水ならん世わたるばかりくるしきやある

若相と云所を過ぎて横田山を通る。此山は白楡のかげにあらはれて、綠林の人をしきる所とも聞ゆれば、益なく覺えていそぎ

ゆく。

はや過ぎよ人のこゝろのよこた山綠の林かげにかくれて夜景に大岳といふ所にとまる　年比うちかなはぬありさまに思ひとりて、髮をそりければ、いつしかゝる旅寢するも哀にて、かの廬山の草の菴の夜の曲は情ある事を、樂天の詩に感じ、此の大岳の柴の宿の雨には、何事を貧道の歌にはづ。

墨染のころもかたしき旅寢しついつしか家を出づるしるしに

五日。大岳を立て遙に行けば、內の白河外の白河と云處を過ぎて、鈴鹿山にかゝる。山よりは伊勢の國にうつりぬ。重山雲さかし。越れば千丈の屛風彌しげく、群樹煙ながし。寒ぐれば三千萬尋の帷帳ます〳〵あつし。峰には松風かた〳〵に調べて、

秋涼が姿しきりに舞ひ、林には葉花稀に殘りて、蜀人の錦纔にちりぼふ。是のみにあらず、山姫の夏の衣は、梢の綠にそめかけ、樹神の音の響は、谷の鳥にこたふ。此路を何里ともしらず越行けば、羊腸坂きびしくして、駑馬石に足なえたり。すべて此山は、一山の中に數山をへだてゝ、千巖の峰口にさはり、一河のながれ百瀨に流れて、衆客の歩み足をひたせり。山重江複は當路に有りといへども、萬里の行者はなかばもいたらず。

鈴鹿川ふるさと遠く行く水にぬれていく世の浪を渡たらむ薄暮に鈴鹿の關屋にとまる。上弦の月峯にかゝれり。虛弓いたづらに歸雁の路にのこり、下流の水谷に落ち、奔箭すみやかにして、虎に似たる石にあたる。爰に旅驛漸くにかさねて、枕を宿緣の草にむすび、雲衣曉にさむし。袖を岩根の苔に敷く。松

は君子の德をたれて、天の如くおほへり。竹は吾友の號あれば、風に臥して夜をあかす。

鈴鹿山さして故郷おもひねのゆめ路の末に都をぞとふ

六日。孟嘗君が五馬の客にあらざれば、函谷の鷄の後、夜をあかしてたつ。山中なかば過ぎて漸く下れば、巖扉けづりなせり。仁者の栖、しづかにして樂み、澗水掘りながす。智者の砌、うごけどもゆたかり。かくて邑里に出で、田中の畔を迂れば、左に見右に見、口田渺々たり。耕□□□□。水を己がひき〳〵に論じ、畦畝あぜを並べて、苗を我とり〳〵に執たり。民の煙りは、父君心躰の恩火よりにぎはひ、王の德は、子民稼穡の土器より開けたり。水龍は本より稻穀を護りて、夏の雨をくだし、電光はかねてより九穗をはらみて三秋をまつ。東作の業力をは

げます、西收の稅たのもしく見ゆ、劉寛が刑を忘れたり。蒲鞭定めて螢に成りぬらん。

苗代の水にうつりて見ゆるかな稻葉の雲の秋のおもかげ

日數ふるまゝに古郷も戀しくて、立かへり過ぎぬる跡をみれば、いづれか山いづれか水、雲より外に見ゆるものなし。朝に出て夕に入る。東西を日の光にわきまふといへども、晩ればとまり明れば立ち、晝夜を露命に論ぜん事はかたし。おのづから一歩を捨て萬歩をはこばゝ、遠近かぎりありて往還を期しつべし。只あはれむ。遙に都鄙の中路に出で、前後の思ひに勞する事を。

ふるさとは山のいくへにへだてきぬ都の空をうづむしら雲

夜陰に市腋と云ふにとまる。前を見おろせば海さし入て、河伯の民うしろにやしなはれ、見あぐれば峯峙ちて、山祇の髮風に

けづる。磐をうつ夜の浪は千光の火を出し、木々になく曉の鶯は孤枕の夢を破る。此ところにとゞまりて心はひとりすめども、明行けば友にひかれ打出ぬ。

松がねのいはしく磯のなみ枕ふしなれてもや袖にかくらん

七日。市腋を立て津島の渡りと云所を舟にて下れば、蘆の若葉あをみわたりて、つながぬ駒も立ちはなれず。菅の浮葉の浪ばかくれども、難面かはづはさはぐ氣もなし。とりこす棹のしづく袖にかゝりたれば、

さして物を思ふとなしにみなれざをみなれぬ浪に袖はぬらしつ

渡りはつれば、尾張の國にうつりぬ。片岡には朝陽の影うらゝにさして、燒野の草に雉啼き揚り、小篠が原に駒あれて、泥み

しけしき引きかへて見ゆ。又園中に桑の下宅あり。宅には蓬頭なる女、簀に向ひて蠶養をいとなみ、園には僚倒たる翁鋤を持て農業をつとむ。大かた禿なる小童部といへども、田を習ふ心ざし、たゞ足をひぢりことする思ひのみあり。若くしてより業を習ふ有さま、あはれにこそ覺ゆれ。實に父兄の教へつゝしまざれども、主孝の志おのづからあひなるものか。

山田うつ卯月になれば夏引のいとけなき子ゝ足ひぢにけり

幽月景あらはれて、旅店に人しづまりぬれば、草の枕をしめて、萱津の宿にとまりぬ。

八日。萱津を立て鳴海の浦に來ぬ。熱田宮の御前を過れば、示現利生の垂跡にひざまづきて、一心再拜の謹啓に頭をかたぶく。暫く鳥居にむかひて、阿字門を觀ずれば、權現の砌ひそかに、

寂光の色に口。夫れ土木霜降りて、瓦上の松風天に吹くといへども、靈驗日新にして、人中の心花春の如くに開けたり。じかのみならず、林梢枝をたるゝ、幡蓋社頭の上におほひ、金玉の檐端をうつ、金色を神殿の面にみがく。かの和光同塵は來際をかぎる期なき事を憐む。羊質未參の後悔に向前のうらみあり。後參の未來に向方のたのみなし。願はくは今日の拜參をもちて、かならず當來の良緣とせん。路次の便詣なりといふ事なかれ。此機感相叶ふ時なり。光をまじふるは冥を導く誓ひなり。明神定めてその名に應じたまはゝ、長夜の明曉は神にたのみあるものをや。

光とづる夜のあまの戸はや明けよあさ日こひしき四方のそら見ん

此浦をはるかに過れば、朝には入海にて、魚にあらずば游ぐべからず。晝は鹽干潟なれば、馬をはやめて行く。酉天は溟海漫漫として、雲水蒼々たり。中上には一葉の舟幽に飛んで、白日の空にのぼる。彼倪男の船中にてなどや老にけん。蓬萊の島は見ずとも、不死の藥をばとらずとも、波の上の遊興は一生の歡會なり。是延年の術にあらずや。

老せじとこゝろをつねにやる人ぞ名をきくしまのくすりを

もうれ

猶此干潟を行けば、小蟹ども己が穴々より出で蠢めきあそぶ。人馬の足にあはてゝ、横にをどり平さまに走りて、我があなあなへ逃入るをみれば、足の下なる穴へ走り來て踏まれて死ぬ。憐むべし。煩惱は家の犬のみにあらず。愛着は濱の蟹ふかき事

を。是を見てはかなく思ふ。我々かしこしや否や。生死の家に着する心は、蟹にもまさりてはかなきものか。

たれもいかに見るめあはれと寄る浪のたゞよふうらにまよひ來にけり

山重なりて又重りぬ。河阻たりて又へだゝりぬ。ひとり舊里を別れて、遙に新路におもむく。知らず、いづれの日か故郷にかへらん。影をならべゆく道づれはあまたあれども、心ざしは必しも同じからねば、心に准ずる氣色は、友をそむきて似たれども、折にふるゝ物のあはれは、心なき身にもさすがに覺えて、屈原が澤に呻ひて漁夫があざけりを耻ぢ、楊岐が路に泣きて、騷人のうらみをいだきけんも、身のたとへにはあらねども、逆旅にして友なきあはれには、何となく心ぼそく、空に思ひしら

れて、

露の身をおくべき山のかげやなきやすき草葉もあらし吹きつゝ

潮見坂といふ處をのぼれば、吳山の長坂にあらずといへども、周行の短息はこゝにあへ□たり。數歩を通じてながき道にすゝめば、宮道二村の山中を除に過ぎて、山はいづれも山なれども、優興は此山にひく。松はいづれも松なれども、木立は此松に止まれり。翠を含む風の音に雨をきくといへとも、雲に舞ふ鶴のころゐに晴の空を知る。松性、汝は千年の貞あれば、面がはりせじ。再往々々。我は一時の命なれば後見期しがたし。

けふすぎぬかへらば又よふたむらのやまぬなごりの松の下道

山中に堺川あり。身は河上に浮んでひとり渡れども、影はみなそこに沈みて我とふたりゆく。かくて三河國にいたりぬ。雉鯉鮒が馬場を過ぎて、數里の野原に、一兩の橋を名づけて八橋といふ。砂に睡る鴛鴦は夏を辭し去り、水にたてる杜若は時を迎へて開きたり。花はむかしの色かはらず咲きぬらん。橋も同じ橋なれども、幾度作りかへつらん。相如が世を恨みしは、肥馬に乘りて昇僊にかへり、幽子身を捨る、窮鳥に類ひて當橋を渡る。八橋よ八橋よ、蜘蛛手に物思ふ人は。昔も過きや。橋柱よ橋柱よ、おのれも朽ぬるか。空しく朽ぬるものは今も又過ぐ。

すみわびて過る三河の八橋を心ゆきてもたちかへらばや

此橋の上に、思ふことを誓ひて打渡らば、何となく心もゆく樣におぼえて、遙かに過れば、宮橋といふ處あり。數双のわたし

板は朽ちて跡なし。八本の柱は殘りて溝にあり。心のうちに昔を尋ねて、言のはしに今をしるす。

宮橋の殘るはしらにことゝはん朽ていく世かたえわたりぬる

けふのとまりをきけば、前程なほ遠しといへども、暮の空を臨み、斜脚既に酉金に近づく。日の入る程に矢橋の宿に落つきぬ。九日。矢橋を立て赤坂の宿を過ぐ。むかし此宿の遊君、花顏春こまやかにして、蘭質秋かうばしき女ありけり。貌を潘安仁が弟妹にかりて、契を三州吏の妻妾にむすべり。妾は良人に先だちて世を早うし、良人は妾におくれて家をいづ。知らず利生の菩薩の化現して、夫を尋ねけるか、又しらず圓通の大師の發心して、妾をすくへるか。互の善知識大なる因緣なり。彼の舊室

の嫉妬が呪詛に抃舞、惡怨かへりて善敎の禮をなし。異域朝嘲の輕仙に鼻酸、持鉢忽に智行の德にとふ。巨唐に名をあげて、本朝に譽を留むる、上人誠に貴し。誰かいはん、初發心の道に入る聖なりとは。是れ則ち本來佛の世に出で人を化するにあらずや。行々むかしを談じて、猶々今にあはれむ。

いかにしてうつゝが道を契らましゆめおどろかす君なかりせば

かくて本野が原を過れば。懶かりし蕨は春の心を生替りて、秋の色疎けれども、分行く駒は鹿の毛に見ゆ。時に日重山にかくれて、月星躔に顯はれぬ。曉をはやめて、豐川の宿にとまりぬ。深夜に立出て見れば、此川は流れ廣く水深くして、誠にゆたかなる渡りなり　河の石瀨に落る浪の音は、月の光にこえたり。

川邊に過る風の響は、夜の色白し。又みぎはひなのすみかには、月より外に眺めなれたるものなし。

しる人もなぎさに浪のよるのみぞなれにし月の影はさしくる

十日。豐河を立て、野くれ里くれ、はるゞと過ぐれば、峯野の原と云處あり。日は野の草の露より出て、若木の枝にのぼらず。雲は峯の松風にはれて、山の色天と一つに染たり。遠望の感情つきがたし。

山の端は露より底にうづもれて野ずゑの草にあくるしのゝめ

やがて高志山にかゝりぬ。石利を踏んで大敵山をうち過れば、燒野が原に草葉萠出て、梢の色煙をあぐ。此林地を遙かに行け

ば。山中に堺川あり。これより遠江國にうつりぬ。

くだるさへたかしといはゞいかゞせん上らん旅のあづまぢ

のせき

此山の腰を南にくだりて、遙かに見おろせば、青海琅々として白雲沈々たり。海上の眺望は此ところに勝れたり。漸く山脚に下れば、匿穴の如くに掘入りたる谷に道あり。身をそばめ聲を呑みて下る。くだりはつれば北は韓康獨往の栖、花の色夏の望み貧しくして　南は范蠡扁舟の泊り。波の聲夕の關に樂ぶ。鹽屋には薄き煙り靡然となびきて、中天の雲片々たり。濱膠には決れる潮涓焉とたまりて、數條の畝磯々たり。浪によるみるめは、心なけれど黒白わきまへ、白洲にたてる鷺は、心あれども毛砂にまとへり。優興にとゞめられて、しばらく立てれば、此

浦の景趣はひそかに行人の心をまどふ。

行過る袖もしほやの夕けふりたつとてあまのさびしとや見ん

夕陽の景の中に、橋下の宿にとまる。此泊は鵜海南に湛へて、遊興をこぎゆく舟にのせ、驛路東に通りて、響號を濱名の橋にきく。時に日車西に馳て牛漢漸くあらはれ、月輪峯に廻りて兎景はじめて幽なり。浦吹く松風は、臥しもならはぬ旅の身にしみ、巖をあらふ浪の音は、聞きもなれぬ老の耳にたつ。初更の間日ごろの苦みにわかれて、七編のこもむしろにゆめみるといへども、深漏はこよひのとまりの珍らしきに目さめて、數双の松の下にたてり。磯もとゞろに寄る浪は、水口かまびすしくのしれども、晴曇りゆく月は、雲のうす衣をかうぶりて忍びや

かにすぐ。彼の釣魚のかげは波の底に入て魚のきもをこがし、夜舟の棹の歌は、枕の上におとづれて、客のねざめにともなふ。夜も既に明ゆけば、星の光りはかくれて、宿立つ人の袖はみえ、餘所なる聲によばれて、知らぬ友にうちつれて出づ。しばらく舊橋に立とゞまりて、珍らしきわたり興すれば、橋の下にさしのぼる潮は、かへらぬ水をかへして上さまに流れ、松をはらふ風の脚は、頭をこえてとがむれどもきかず、大かた羈中の贈答は、此處に儲けたり。誰か水驛の跡をいはん。

橋本やあらぬ渡りと聞きしにもなほ過ぎかねつ松のむらだち

浪まくらよるしく宿のなごりには殘してたちぬまつのうら風

十一日に橋本をたつ。橋のわたりより行々たちかへりみれば、あとに白浪の聲は、すぐるなごりをよびかへし、路に青松の枝は、あゆむ裳を引きとゞむ。北にかへりみれば、湖上はるかに浮んで、波のしわ水の顏に老いたり。西にのぞめば、湖海ひろくはびこりて、雲のうきはし風のたくみにわたす。水鄕のけしきは、彼も此も同じけれども、湖海の淡鹹は氣味これ異なり。泡のうへには浪に翻つ雎鳩みさご涼しき水をあふぎ、舟の内には唐櫓おす聲秋の雁を長め、て以下行て夏の空にゆく。本より興望は旅中にあれば、感傷しきりに廻りて、おもひやみ難し。此處をうち過ぎて、濱松の浦にきたりぬ。長汀砂深くして、行けば歸るが如し。萬株□しげくして、風波聲をあらそふ。□□湖を呑めば即ち曲浦の曲より吐出し。濱漪珠を沙汰ば則ち

疊巖の疊にくだきしく。優なるかな艶なるかな。忘れ難く忍びがたし。命あらば□□年か再び來て此浦にすぎん。

なみははま松には風のうらうへにたち止まれとやなきしきるらん

林の風におくられて、廻澤の宿をすぎ、はるかに見わたして行けば、岳の邊にはもりあり、野原には澤あり。峰に立つ木は枝をうへにさして生たれども、水にうつる影は梢をさかさまにして互に相違せり。水と木とは相生中よしときけども、うつるかげは向背して見ゆ。時既にたそがれになれば、夜の宿をむかへて池田の宿にとまる。

十二日。池田を立てくれ〳〵行けば、林野同じさまなれども、ところ〳〵路となれば、見るに從ひて珍らしく、天中川（天龍

川）をわたれば、大河にて水面三町ばかりあれば、舟にて渡る。流はやく波さがしくて、棹もさしえねば、大なる扒をもちて、横さまに水をかきて渡る。かの王覇が忠にあらざれば、滹沱河の澌むすぶべきにあらず。張博望が牛漢の浪にさかのぼりけん、浮木の舟のかくやとおぼえて、

よしさらば身をうき木にてわたりなんあまつみそらの中川の水

上の野原を一里ばかり過れば、千草万草露の色なほあさく、煙野煙徑、風の音まだよはし。あはれ同じくは、此道の秋の旅にてあれな。

夏草はまたうらわかき色ながら秋にさきだつ野邊の露かな

山口といふ今宿を過れば、路は舊によつて通ぜり。野原を後に

し、里村をさきにして、うちかへ〳〵過行けば、事のまゝ申す社に參詣す。本地をばしらず、佛陀にもいますらん、薩埵にもいますらん。中丹をば神かならず哀れみたまふべし。今身もおだやかに、後身もおだやかに、杉のむら立は三輪山にあらずとも、戀しくば尋ねてもまゐらん。願ふはたゞ畢竟空寂の法味を納受して、眞實不虛の感應をたれたまへ。

おもふことのまゝにかなへば杉たてる神のちかひのしるしとぞ見ん

社の後ろの小川をわたれば、佐夜中山にかゝる。此の山口をしばらくのぼれば、左も深谷、右も深谷、一峯ながきみちは、想のうへに似たり。兩谷の梢を眼下に見て、群鳥の囀りを足の下に聞く。谷の兩邊は高く。又山の間をすぐれば、中山とは見えたり。山はむかしの山九折の道ふるきが如し。梢はあらたなる梢、千條のみどりみな淺し。此ところはその名殊に聞きつる所なれば、一時のほどに百般立とまりて打眺めゆけば、秦蓋の雨の音は、濡れずして耳をあらひ、商絃の風の響きは、色あらずして身にしむ。

わけのぼるさよの中山なか〳〵に越えてなごりぞくるしかりける

時に胡馬ひづめ疲れて、日烏翅さがりぬれば、草命をやしなはんがため、菊川の宿にとまりぬ。或家のはしらに、故中御門中納言宗行卿。かく書付けられたり。彼南陽縣の菊水、下流を汲んで齡をのべ、此東海道の菊河、西涯に宿りて命を失くさんことを、殊に哀れとこそおぼゆれ。身は累葉の賢枝にうまれ、官

は黄門のたかき階にのぼる。雲上の月の前には、玉の冠の光をまじへ、仙洞の花の下には、錦の袖の色をあらそふ。身足り榮あまりて、時の花と匂ひじかば、人それをかざして、近きも從ひ遠きも靡きしも、かゝるうきめ見むとは思ひやはよるべき。さてもあさましや、去る承久三年中旬、天下風あれて海内の波さからへりき。鬪亂の亂將は花城よりみだれ、合戰の戰士は夷國より戰ふ。暴雷雲を響かして、日月光をおほはれ、軍慮地を動かして、弓劍威をふるふ。其あひだ萬歳の山のこゑ、風忘れて枝をならし、一清の河の色、波あやまつて濁りをたて、茨山汾水の源流たかく流れ。はるかに西海の西にくだり、卿相羽林の花族、遠く落ちて、東關の東にちりぬ。是のみにあらず、別離宮の月の光り、處々にうつりぬ。雲井をへだてゝ旅の空にす

み。鷄籠山の竹の聲、方々にうれへたり。風のたよりを絶へて外土にさまよふ。夢かうつゝか、むかしも未だきかず。錦張玉口の床は、主失せて武客の宿となり、麗水蜀川の貢、數をつくして邊民のたからとなりにき。夜晝たにぶれて衿をかさねし鴛鴦は、千歳比翼のちぎりいきながらたえ、朝夕にうやまひて袖ををさめし僮僕も、多年知恩のこゝろざし思ひながら、別れぬ。實に會者定離のならひ。目のまへに見ゆるに、刹利も首陀も、かはらぬ奈落の底のありさま。あはれにこそおぼゆれ。今は歎くとも、たすくべき人もなければ、涙をさきだてゝ、心弱くうち出ぬ。その身にしたがふものは甲冑の兵、こゝろを一騎の客にかく。其目にたつものは、劍戟のつるぎ、魂を寸神の胸に消し、せめて命のをしさにかく書付けられけんこそ、する墨なら

ぬ袖の色〻あらはれぬべく覺ゆれ。

心あらばさぞなあはれと水くきのあとかきわくる宿のたび人

妙井渡と云ふ處の野原をすぐ。中呂の節にありて、小暑の氣やう〳〵催せども、いまだ納涼の心ならねば手にむすばず。

夏ふかき清水なりせば駒とめてしばしすゞまば日はくれぬべし

播豆藏の宿をすぎて、大堰川をわたる。此川は川中に渡りおほく、又水さがし。流れを越え島をへだてゝ、瀨々潟々にわかれたり。此道を二三里行けば、四望かすかにして、遠情おさへ難し。時に水風例よりも烈しくて、白砂霧の如くにたつ。笠をかたぶけて駿河國にうつりぬ。前島を過るに浪はたゝねども、藤

枝の市を通れば花はさきかゝりたり。

前島の市には波の跡もなしみな藤枝のはなにかへつゝ

岡部の里邑を過ぎてはるかにゆけば、宇都の山にかゝる。此山は山中に山を愛するたくみのけづりなせる山なり。碧岸の下に砂ながうして巖をたて、翠嶺の上に葉おちて壤をつく。肱を背におひ、面を胸にいだきて、漸くにのぼれば、汗肩袒の膚になれて、單衣□□□かさぬといへども、懷中の扇を手にうごかして、微風の扶持可なり。かくて森々たる林をわけて、峨々たる峰を越ゆれば、貴名の譽は此山にたかし。大かた遠近の木立に心をわけられて、一方ならぬ感望に思ひみだれて過れば、朝雲峯くらし、虎李將軍が栖をさり、暮風谷寒し、鶴鄭大尉が跡にすむ、既にして赤羽西にとび、眼にさへぎる物とては、檜原、

槇の葉、老の力こゝを疲れたり。足にまかするものは、苔の岩根、蔦の下道、嶮難にたえず。しばらくうち休めば、修行者一兩客、繩床そばにたてゝ又休む。

立かへるうつの山ぶしことづてよ都こひつゝひとり越えき

と

行々おもへば、すぎ來ぬる此間の山河は、夢に見つるか現にみつるか、昨日とやいはん、今日とやいはん。むかしを今とおもへば我身老たり。今を昔とおもへば我心わかし。古今をへだつるものは、わが心の中懷なり。生死涅槃猶如昨夢といへるも、あはれにこそおぼゆれ。昨日過にしあとはけふの夢となり、今日此處をすぐる、明日いづれの處にして、今日を昨日といはん。誠にこれ過ぬるかたの歳月は、夢よりゆめにうつりぬ。昨日今

日の山路は雲より雲に入る。

あすや又きのふの雲におどろかん今日はうつゝのうつの山ごえ

手越の宿にとまりて足を休む。

十三日。手越を立て、野邊をはる〳〵と過ぐ。梢を見れば、淺綠の夏のはじめなりといへども、草むらを望めば、白露まだきに秋の夕に似たり。北に遠ざかりて雪白き山あり。問へば甲斐の白峰といふ。年來聞きし處、命あれば見つ。およそ此あひだ、數日の心ざしを養ひて、百年の齡を延べつ。かの上仙の藥は、下界のためにはしなき物をや。

をしからぬ命なれどもけふはあればいきたる甲斐のしらねをも見つ

宇度の濱をすぐれば、浪の音、風の聲、ことに心すむ處なり。濱の東北に靈地の山寺あり。四方たかく晴れて四明天台の末寺たり。堂閣繁昌して本山中堂の儀式をかる。一乘讀誦の聲は十二廻中に間絶る事なく、安居一夏の行は、採花汲水のつとめ驗をあらそふ。修する所は中道の教法。論談を空假の頤に決して、利する所は下立の衆生、歸依を遠近の境にいたす。伽藍の名をきけば行基菩薩の建立、土木の風情、□□□□□□□。本尊の實を尋ぬれば觀世音と申す、補陀落山の聖容、出現の月あきらかなり。大かた佛法興隆のみぎり、數百箇歳の星漢霜ふりたり。僧俗止住のみね、三百餘宇の禪房霞ゆたかなり。雲船の石神山腰に護りて惡障をふせぎ、天形の木容は、寺内に納めて善業をなす。〔千手觀音かの山より石舟に乘て此地にくだりたまひけり。其舟善神となりて、山路の大坂に石舟護法と號す。〕彼海岸山の千眼は、南方より北を飛んで、有縁を此山に導く。□宇渡濱の□品、天面を地に得て、舞樂を此濱に學べり。〔むかし稲河太夫といふ人、天人の濱松の下に樂をしらべて舞ひけるを見て、まなび舞ひけり。又人の見るをみて、鳥の如くに飛んで、雲に隱れにけり。其跡をみれば、一の面形を落せり。太夫これをとりて寺の寶物とす。よつてその寺に舞樂をしらべて、法會を施行す。其太夫が子孫舞人氏とす。二月十二日常樂會として、寺中の大營なり。〕その後天人歸り、廻雪は春の花の色、みねにとゞまり、曲風は□□月のころ、□□□□□。よつて此濱をすぐれば、松に雅琴有て浪につゞみあり。天人の樂今聞くに似たり。

袖ふりし天津をとめが羽衣のおもかげにたつあとの白波

江尻の浦をすぐれば。青苔石に生ひ、黒布磯に張る。南は澳の海、漠々と波をわかして孤帆天にとび、北は茂松欝々と枝たれて、一道つるをなす。漁夫の網をひく、身を助けんとして身をくるしみ、游魚の鉤をのむ、命を惜みて命をほろぼす。人いくばくの利をか得たる、魚いくばくの餌をか求むる。世をわたる思ひ、命をたばふこゝろざし、彼も此もともに同じ。これのみかは、山にあせかく樵夫は、北風をになひて夕にかへり、野にあしなゆる商客は、白露をはらうてあかつきに出で、面々の樂まち〳〵なりといへども、各々の苦みは、皆これ渡世の一事なり。

人ごとにはしる心はかはれども世をすぐるみちはひとつな

りけり

此浦を遙かに見渡して行けば、海松は浪の岩根に根をはなれたる草、海月は潮のうへに水にうつる影。ともにこれ浮世を論じて人をいましめたり。

浪のうへにたゞよふ海の月もまた浮れゆくとそ我をみるらん

清見が關を見れば、西南は天と海と高低ひとつに眼をまどはし、東北は山と磯と嶮難おなじく足をつまだつ。磐の下には波の花風に開きて春のさだめなく、峰の上には松の色みどりを含みて秋を恐れず。浮天の波は雲を汀にて、月のみふね夜出てこぎ、沈陸の磯は磐を道にて、風の使脚あしたに吹きてすぐ。名を得たる所かならずしも興を得ず。耳に耽る所かならずしも目にふ

けらず。耳目の感ふたつながら得るは此浦にあり。浪にあらひてぬれ〜し□屋に道をとへば、松風むなしくこたふ。□□□□□□□□□岸柳にくるしみを尋ぬれば、槿花變じて□□□。（以下汪ナラン）石あり。關屋の邊に布をたゝみといふ處あり。むかし關守の布をとりたるがつもりて石になりたるをいへり。）

吹よせよ清見うら風わすれ貝ひろふなごりのなにしおはゞや

かはらばやけふみるばかり清みがたおほはじ袖にかゝるなみぢは

海老はなみにおよぎ、愚老は汀にたゞよふ。ともに老て腰かゞまる。汝は知るや、生涯浮べる命今いくほどと。我はしらず、幻中の一瞬の身、□□□□□。かくて興津の浦をすぐれば。鹽

竈の煙りかすかに、浦人の袖うちしほれ。邊宅には小魚をさらして、屋上に鱗を葺けり。松のむら立なみのゆるいろ、心なき心にも心あらん人に見せまくほしくて、

たゞぬらせゆくての袖にかゝる波ひるまのほどはうら風もふく

岫崎といふ處は風飄々と飜りて砂をまはし、波浪々とみだれて人をしきる。行客こゝにたづさはりて、しばらく寄引く浪間をうかゞひて急ぎ通る。左は嶮岳の下、岩のはざまをしのぎ行く。右はかすかなる浪の上、□をのぞめば眼うけぬべし。はる〳〵と行くほどに。大和田の浦に來りて、小船の沖中にたゞよへるを見る。飄帆飛んで萬里風便をたのみて白煙に入り、鼇波動きて千雲夕陽をあらひて紅藍に染む。海舘のうちにこゝ□をのみ

とめて身をばとゞめず。

わすれじな波の面影立そひてすぐるなごりのおほわだのうら

湯居の宿を立て、はるかに行けば、千本の松原といふ處あり。老のまなこは極浦の浪にしほれ、朧なる耳は長松の風にはらふ。晴の天の雨には、翠蓋の笠あれば袖をたくらず。砂の滸の水には、白□□花ちれどもを風をうらみず。行々あとをかへりみれば、前途いよ〳〵ゆかし。

きゝわびぬちゞの松原ふく風の一かたならずわれしほるこゑ

蒲原の宿にとまりぬ。菅菰の上にふせり。

十四日。蒲原を立てはるかに行けば。前路に進みさきだつ賓は、

馬に水かひて、□□□□河□後にさがりぬ。後程にさがりくるおのれは、野に草しきて、まだ來ぬ人をさきにやる。先後のあはれは、行旅のならひにも思ひしられて、うちすぐるほどに、富士川をわたりぬ。此河□中にこそ□□石を流す。巫峽の水のみ何んぞ舟を覆がへさんや。人の心は此水よりさかしければ、老馬をたのみてうち渡る。老馬々々。なんぢは智ありければ、山路の雪のみにあらず、川のそこの心もよくしりにけり。

音にきゝし名高き山のわたりとてそこさへふかし富士川の水

浮島が原をすぐれば、名はうきしまと聞ゆれど、まことは海中とは見えず、野徑とは見つべし。草むらあり、木の林あり、はるかに過ぐれば、人煙片々と絶えて又たつ。新樹程をへだて、

隣たがひにうとし。東行西行の客はみな知音にあらず。村南村北の道にたゞ山海を見る。〔山の頂に二泉あり。湯のごとくわくと云ふ。むかしは仙女此峰に遊びて、常にあり。ひがしふもとに新山といふ山あり。延暦年中に天神くだりてこれを築くといへり。〕すべて此みねは、天漢の中に沖りて、人衆の外に見ゆ。眼をいたゞきて立つ。魂恍々とほれたり。

いくとしの雪つもりてかふじの山いたゞきしろきたかねなるらん

問ひきつるふじのけふりは空にきえて雲になごりのおもかげぞたつ

むかし採竹翁といふものあり。女を赫奕姫といふ。翁が家の竹林に、鶯の卵□□子の形にかへりて巣の中にあり。翁養うて子とせり。人となりて貌よき事たぐひなし。光ありてかたはらを照す。嬋娟たる両鬢は秋の蟬の羽、婉転たる蛾眉は遠き山の色、一たび咲めば百の媚生り、見聞く人皆はらわたを断つ。此姫は前生に人として翁に養はれたりけるが、天上にうまれて後は。宿世の恩を報ぜんとて、しばらく此翁が竹に化生せるなり。あはれむべし、父子のちぎりの他生にも變ぜざることを。これよりして青竹の節の中に黄金出來て、貧翁たちまちに富人となりけり。其間榮花の家、好色のみち、月卿光を爭ひ、雲客色を重んじて、艶言をつくし、懇懐を抽んで、つねに赫奕姫が室屋に來會して、絃をしらべ歌を詠じてあそびたりける。されども鶯姫難詞をむすびて、うちとくる心もなし。時の帝此よしを聞しめして、召しけれども参らざりければ、帝御狩あそびのよしに

て、鶯姫が竹亭に御幸したまひて、鶯のちぎりをむすび、松のよはひをひきたまふ。鶯姫おもふ所有て、後日をちぎり申しければ、帝むなしく歸りたまひぬ。かたへの天これを知りて、玉のまくら金の釵□□□、寶釧未だ手馴れざるさきに、飛車くだりて天にあがりぬ。開城のかためも雲路に益なく、猛子が力も飛行には由なし。時に秋の半、月のひかりくまなきころ、夜半のけしき、風のおとづれ、物を思はぬ人も物思ふをりふし、きみのおもひ、臣の懐舊、□□□□□□おなじく袖をうるほす。彼の雲をつなぐにつなぎえず。雲の色慘々として暮の思ひ深し。□□風を追ふともおはれず。風の聲颯々として夜の恨みながし。華民は奈木の孫枝なり。藥の君臣として万民病を癒いやす。鶯姫は竹林の子葉なり。毒の化女として一人の心をなやます。方士が

大眞院をだづねし、貴妃がさゝめごと、二たび唐帝のおもひにかへり、使臣の富士のみねにのぼる、仙女がわかれの書、なか なか和君の情をこがせり。〔鶯姫天にあがりけるとき、帝の御ちぎりさすがにおぼえて、不死の藥に歌をかきぐしてとゞめおきたり。其歌に云、

今はとてあまのはごろもきる時ぞきみをあはれとおもひ出ぬる

みかど是を御覽じて、わすれがたみは見るもうらめしとて、怨戀にたえず、青鳥をとばし雁札を書きそへて、藥をかへしたまひけり。其返事、

あふことのなみだにうかぶ我身にはしなぬくすりもなにかはせん

使節智計をめぐらして、天に近き處は此山にしかじとて、富士山に上りてやきあげければ、藥も文も煙りとむすぼれて空にあがりけり。これより此峰に戀の煙をたてたり。よつて此山をば不死の峯といへり。しかるを郡の名に付けて富士とかくにや。」彼も仙女なり、これも仙女なり、ともに戀しき袖にたまれる。彼は死して去り、これは生きて去る。同じく別れて夜の衣をかへす。すべてむかしも今も、好女は國をかたぶけ人をなやます。慎んで色にふけるべからず。

あまつひめ戀しおもひのけふりとてたつやはかなきおほそらの雲

車返といふ處をすぐ。此ところはもし蟷螂が道にあたりて行人をとめけるか、又若遊兒が土城をつくりて孔子にこたへけるか。「むかし小童部の路中に小家を造りてあそびけるに、孔子のとほるとて、車におやうし、そこのけといさめられけるに、小童部の云、車は家のあり所をよきて過ぐべし、未だ聞かず家の車にさることをと。孔子これを聞て、車をめぐらしてかへりにけり。」もし又勝母の閭ならば、曾子にあらずとも、誰もいかゞ通らん。「曾子は孝ふかき人にて、不孝のものゝゐたる處は、車をかへしてとほらず。」嶮岨の地なれば、太行の路と口いひつべし。「この道はさがしくて、よく車をくだく。」されども騎馬の客なれば、うちつれて通りぬ。

むかしたれこゝにくるまのわづらひてながえを北にかけはじめけん

木瀬川の宿にとまりて。萱屋の下に休む。又かの中納言和歌一

首よみて、一筆の跡をとゞめられたり。

けふすぐる身をうきしまが原にきてつひの道をぞ聞きさだめつる

これを見る人、心あれば皆袖をうるほす。それ北州の千年は限を知て壽をなげく。南州の不定は期をしらずして命をたのむ。コノ以下文案光行ニ似ス可疑、詐文ニモ似ズ まことに今日ばかりと思へども。□□□□□□心のうちを推すべし。おほかたは昔語にだも、あはれなるには涙をのごふ。何ぞいはんや、我も人も見し世の夢なれば、おどろかすにつきて哀れにこそ覺ゆれ。さても峯の梢を拂ひしあらしの響きに、及ばぬ谷の下草までも吹きしほられて、かずならぬ露の身もおき處なくなりにしより、かくいひて命を惜みて亡せし人の言葉を存す。厭ふ身は今まで有て、よそに見るこそあはれなれ。此歌

の心を尋ぬれば。納言浮島が原を過ぐとて物を肩にかけのぼる者に逢たりけり 問へば按察使光親卿ノ僮僕、主君の遺骨を拾ひて都にかへると、泣く〳〵いひけり。其を見るに身の上の事なれば、魂はいきてよりさこそはきえにけめ。本より遁れまじきとは知りながら、自ら虎口より出て龜毛の命もや得ると、なほ待たれけん心に、今は終にと聞定めて、げに浮島が原より、我にもあらず馬の行くにまかせて、此宿に落つきぬ。今宵ばかりの命、枕の下のきり〴〵すと共に契りあかして、かく書留めて出られけんこそ、あはれをのこすのみにあらず、無跡までも情も深く見ゆれ。

さぞなげに命もをしのつるぎ羽にかゝるあはれはうき島がはら

十五日。木瀬川を立て遇澤といふ野原をすぐ。此野何の里ともしらず、遙々とゆけば、納言はこゝにてはやく暇候ふべしと聞えけるに、心中に所作あり、今しばらくと乞ひうけられければ、なほ遙かに過行きけん、まことに旅の空はいかゞ物あはれなるべき。況や馬嵬の道に出て牛頭の境にかへらんとする涙の底にも、都に思ひおく人々や心にかゝりて、ありやなしやのことの葉だにも、今一度きかまほしかりけん。されども隅田川にもあらねば、言問ふ鳥のたよりだにもなくて、此原にてながく日の光にわかれ、冥道にたちかくれにけり。

都をばいかに花人はるたえてあづまのあきの木の葉とはちる

やがて按察使左兵衛督〔有雅卿〕、おなじく此原にて、すゑの露もとの雫と後れ先だちにけり。それ人つねの生なし、家つねの居なし。是は世のならひ事の理なり。されども期來つて生を謝せば、理をのべて忍びつべし。緣つきて家をわかれば、ならひを存じて慰みぬべし。別れし處はうき世なり、城の外の荒々たる野原のたびの道、沒せん時は未だしき時なり。恨みをふくみし蕭々たる秋の天の夕の空、誠に時の災孽の遇にあへりといへ共、こゝにこれ先世の宿業のむくゆる酬なり。抑かの人々は官班身を□□名譽聞をあぐ。君恩あくまでうるほして降雨の如し。人望かたゝに開けて、盛りなる花に似たりき。中に黃門都護は家の貫首として、一門の間に鍵をおし開き、朝の重臣として、万機の庭に線をとゝのへき。誰か思ひし、天俄に災をくだして天命をほろぼし、地忽ちに天をあけて地望を失はんとは。あは

れなるかな、入木の鳥跡は千歳のかたみにのこり、歸泉の靈魂は九夜の夢に迷ひにき。されども善惡心に強くして、生死はただ恨なりと思へりき。つひに十念相續して他界にうつりぬ。夏の終秋のはじめ、人醉ひ世濁りし、其間の妄念はさもあらばあれ、南無西方彌陀觀音、その時の發心等閑ならずば、來迎たのみあり。これやこの別れし野邊とうちながめて過ぐれば、淺茅が原に風たちて、なびく草葉に露こぼれ、無常の鄕とはいひながら、無慚なりける別れかな。有爲のさかひと思へども、憂かりける世の中かな。官位は春の夢、草の枕にながく絶えぬ。樂榮は朝の露、苔のむしろに消えはてぬ。死出の山路には臨はぬならひなれば、後世の恨みもいかゞせん。東の道にひとり出て、あやふき武士に誘はれ行きけん、心のうちこそあはれなれ。か

の冥吏苛責の場には、ひとり自業自得の斷罪に舌をまき、此の妻息別離の跡には、各不意不慮の横死に涙をやる。生きての別れ、死しての恨み、二ッながらをいかゞせん。眞をうつしてもよしなし、一生□□いくばくならむ。魂を訪ひて足りぬべし、二世のちぎり空しからじ。

おもへばな憂かりし世にもあひ澤の水のあはとや人のきゆらん

けふ足柄山をこえて、關の下の宿にとまるべき□、日暮烏むらがり飛んで、林頭に鷺ねぐらをあらそへば、山の此方竹の下といふ處にとまる。四方は高山にて、一川谷にながれ、嵐落ちてまくらを洗ふ、聞けばこれ松の音、霜さえて袖にあり。拂へばた月のひかり、寢覺のおもひにたえず。ひとり起居て殘りの夜

をわかす。

見し人にあふ夜の夢のなごりかなかげろふ月に松風のこゑ

ふくる夜のあらしのまくらふしわびぬ夢もみやこに遠ざかりきて

十六日。竹の下を立て、林中をすぎて遙々と行く。千束のはしを獨梁にさしこえて、足柄山に手をたてゝ登れば、君子松いつくしくて、貴人の過る笠をとゞめ、客雲梢にかさなりて、故山の頂あらたに高し。朝の間雨ふりて、松の風口口聲の虛名をあらはす。ほどなく日岳口の東にのぼりて、雲はやく驛路の天に晴れぬ。彼山祇のむかしの歌は、遊女が口につたへ、嶺猿の夕の啼は、行人の心をいたましむ。〔むかし青墓の宿の君女、此の山をこえけるとき、山神おきなに化して歌を敎へたりけり。あ

しがらといふは是なり〕時に萬仞峰高し、樹根にまとうて腰をかゞめ、千里巖さがし、苔の鬚をかなぐりて脛をのゝく。山中を胡馬がへしといふ。馬もしここに留まらましかば、此山をば鞍馬とぞいはまし。これより相模國にうつりぬ。

秋ならばいかに木葉のみだれましあらしぞ落つるあしがら

の山

關下の宿をすぐれば、宅をならぶる住民は、人を宿して主とし、窓にうたふ遊女は、客をとゞめて夫とす。あはれむべし。千歲の契りを旅宿の一夜の夢にむすび、生涯のたのみを往還の諸人の望にかく。翠帳紅閨、萬事の禮法異なりといへども。草菴柴戸、一生の觀念これ同じ。

さくらとてはなめく山の谷ほこりおのがにほひもはるは一

とき

道は順道なれども、宿を逆川といふ處にとまる、〔潮のさすとき、水の上さまに流るれば、逆川といふ。〕北は片岡田畷うちすきみえて、薄の燒折青葉にまじり、南は漫海蒼波わきあがりて、□□□白馬ならび渡る、しかのみならず、前汀東西素布を長疊の浪にあらそひ、後園町段綠衫を萬莖の竹にかる。時に暮行く日脚は、景を遠島の松にかへし、來り宿る疎人は契りを同驛の莚にむすぶ。彼の草につなぐ疲馬は、胡國を忍びて北風に嘶え、野にやすむ群牛は、吳地にならびて夜の月に喘ぐ、棹歌數聲、舟船を明月峽のほとりによせ、松琴萬曲、琵琶を潯陽江の汀に聞く。一生のおもひ出、今夜の泊りにあり。

行とまる磯邊の浪のよるの月たびねの袖にまたやどせとや

十七日。逆川を立て平山を過ぎて。□□□□□高倉宰相中將（範茂）筥根山のうみじり、急河と云ふ淵にて底の水屑と沈みにけり。つら〳〵そのむかしを思へば、あはれにこそおぼゆれ。日本國母の貴光をかゞやかす、光の末に身をてらし、天子聖皇の恩波をそゝぐ、波の雫に家をうるほす。羽林の花新たに開け、春にあへるにほひ天下に薫じ、射山の風あたゝかにあふぐ。時にあたるひゞき遠近にふるふ。圖らざるや、榮木嵐たゝきて、其花塵となり、逝水ながれ急にして、其身泡と消えんとは。連枝の契片枝早くをれぬ。家苑の地あと空しく殘れり。魦鮒のむつび一頰をならべず。他鄕の水おちて歸らず。一生こゝにつきぬ。此川は三家の水口たるか。言ふことなかれ、水こゝろなしと。波の聲嗚咽して哀傷をなす。

ながれ行てかへらぬ水のあはれにもきえにし人のあと〳〵見ゆらん

此次にあひ尋ぬれば、一條の宰相中將（信能卿）美濃國遠山といふ處にて、露の命をけしてけり。それ洛中に別れて□□維ぎし日、家を離れしうらみ、いよ〳〵惡業のなかだちたりしかども、旅のみちに手をひらけしときに、家を出しよろこび、還て善緣のすゝめにあへり。掌を合せ念を正しくして、魂ひとり去りにけり。臨終の義を論ぜば往生ともいふべし。西方には聖衆定めて九品の寶蓮にみちびくらん。彼羽化を得て天闕にあそびしは、八座のむしろ家門の塵を打拂ひ、虎賁を兼て仙洞にはしる。累葉の花寶枝の風に綻びき。傷哉、平日の蔭□盛にして、未だ西天の空に傾かざるに、壽堂の扉ながくとぢて、北邙の地に埋

むことを。花の床を何かざりけん、跡にとゞまりて主なし。親族は悲しめどもよしなし。旅に出てひとり心ざしぬ。楊國忠が他界にうつりし、知らず人の恨をなす事を。平章事の遠山にほろびし、おもひやりき、身の悲しみをふくみなんことを。彼の東平王の舊里をおもふ。墳上の□□風雨になびく。誠にさこそと哀れにこそは覺ゆれ。

おもひきや都を夜半にわかれぢの遠山野邊に露きえんとは

それ人のうまれたるは庭におつる木葉の風に動くが如し。風やみぬれば動かず。死を思へば旅に出る行客の宿にとまるが如し。□□□□□□□□こゝに別れぬといへども、かしこには生れぬ。たゞ煩惱のうらみかさなる事をかなしみ、愚痴の心を知らざる事を恨むべし。はやく別れを惜まん人は、再會を一仙の國

に約し、恩をこひん人は、追福を九品の道に訪ふべし。

今更になになげくらんする露もとよりきえん身とはしらずや

大磯の浦小磯の浦を遙々とすぐれば、雲のかけはし波の上に浮みて、鵲のわたし守あまつ空にあそぶ。あはれさびしき旅の空かな。ながめなれてや人はゆくらん。

大いそやこいそのうらのうら風にゆくともしらずかへる袖かな

相模川を渡りぬれば、懐島に入る。砥上が原を出で、南のうらを見やれば、浪の文を織りはへて、白き色をあらひ北の原をのぞめば、草の緑そめなして淺黄さらせり。中に八松と云處あり。八千歳の影にたちよりて、十八公の榮をさかりにす。

やつまつの八千代のかげに思ひなれてとがみが原に色もかはらじ

固瀬川を渡りて、江尻の海汀をすぐれば、江の中に一峯の孤山あり。孤山に靈社あり、江島大明神と申す。威驗ことにあらたにして、御前を過ぐる下り船は上分を奉る。法師は參らぬと聞けば、その心を尋ぬるに、むかし此邊の山寺に禪僧有て、法華經を讀誦して、夜をあかし日をくらす。其時女の形出來りて、夜毎に聽聞して、あくれば忽然としてうせぬれば、其行方をしらず。僧これを怪しみて、糸を構へて密に裾につけにけり。あくる朝に糸をたゞしてみれば、海上に引かれてかの山にいたりぬ、巖穴に入て龍尾につけたり、神龍顯形して後、僧に耻ぢてこれを入れずといへり。それ權現は利生の姿なり。化現せば何ぞ

姿にはゝからん、弘經は讀誦の僧なり、經を貴まば何ぞ僧を厭はんや。深き誓ひは海に滿てり。波に垂るゝ跡、心の體は天に知れたり。雲にひゝく聲、されど神慮は人しらず。きねがならはしに從ひて、ふし拜みてとほりぬ。

江のしまやさして鹽路に跡たるゝ神はちかひのふかきなるべし

路の池に高き山あり。山の峰禿にて貴からずといへ共、恠石ならびて興なきにあらず。歩みをおさへて石を見れば、昔日の掘穿ちたる磐どもなり。海も久しくなれば、干るやらんと見ゆ。腰越といふ平山のあはひを過れば。稻村といふ處あり。さかしき岩の重なり臥せる濱をつたひ行けば、岩にあたりてさきあがる浪の、花の如くにちりかゝる。

うき身をばうらみて袖をぬらすともさしもや波にこゝろくだかん

申の斜に湯井の濱に落着きぬ。しばらく休みて此處を見れば、數百艘の舟ども綱をくさりて、大津の浦に似たり。千萬宇の宅軒をならべて、大淀のわたりに異ならず。御靈の鳥居の前に日をくらして後、若宮大路より宿處につきぬ。月さしのぼりて、夜も半に更にければ、おきたる老人おぼつかなくおぼえて、

都には日をまつ人を思ひおきてあづまの空に月を見るかな

鷄鳴八聲のあかつき、旅宿一寢の夢さめて、立出見れば月の光屋上の西に傾きぬ。

おもひきや都はにしに有明の月かたぶけばいとゞこひしき

十八日。此宿の南の軒端に高き丸山あり。山の下に細き小川あ

り。峯のあらし聲落ちて、夕の袖をひるがへし、灣の水ひゞき そゝぎて夜の夢をあらふ。年頃ゆかしかりつる所か、いつしか 周覽相催ほし侍れども、未だ旅なれば、今日は空しく暮しつ。 相知りたる人は一兩人侍るを、頼みて物など申さんと思ふほど に、たがひて無ければ、いとゞたよりなくて、

たのめつる人はなぎさのかたつ貝あはぬにつけて身をうら みつゝ

さらぬ人は多けれども、うとければ物いはず。其中にふるき得 意一人ありて、不慮の面談を遂ぐ。往事の夢に似たることを憐 みて、次口に昔に變ることを歎く。互に心懷を述べて暫く相語 る。其後立出て見れば、此處の景趣は海あり山あり、水木たよ りあり、廣きにもあらず、狹きにもあらず、街衢は方々に通せ

り。實にこれ聚をなし邑をなす。鄕里都を論じて、望まづ珍ら しく、豪を選び賢をえらぶ、門榜しきみをならべて地又賑へり。 おろ〳〵將軍の貴居を垣間見れば、花堂高くおしひらいて、翠 簾の色喜氣をふくみ、朱欄妙にかまへて、玉砌の礎光をみが く。春にあへる鶯の聲は、好客堂上の花にあざけり、あしたを おくる龍蹄は、參會門前の市に嘶ゆ。論せず、本より春日山よ り出たれば、貴光たかく照して、萬人みな瞻仰し、士風塵をは らふ。威驗遠く誡めて、四方ことゞく聞きて畏る。何ぞ況ん や、舊水源口すみまさりて、清流いよ〳〵遺跡をうるほし、新 花榮鮮にひらけて、紫藤はるかに萬歲をちぎる。凡そ座制を帷 帳の中に廻らして、徵集郡國の間につゞめたり。しかのみなら ず、家室は扃をわすれて夜の戸をおしひらき、人倫は心を調て

ほこるともほこらず、惠政の至り治まりてみゆ。

夜の戸ものどけき宿にひらくかなくもらぬ月のさすにまかせて

此縁邊に付て、おろ〳〵歷覽すれば、東南の角一道は、舟檝の津、商賈の商人、百族にぎはひ、東西北の三方は、高卑の山、屏風の如くに立廻りて處をかざれり。南の山の麓に行て、大御堂新御堂を拜すれば、佛像烏瑟のひかり、瓔珞眼にかゞやき、月殿畫梁のよそほひは、金銀色をあらそふ。次に東山の裾にのぞみて、二階堂を禮す、是も餘堂に踔躒して、感歎及びがたし。第一第二の重なれる檐には、玉の瓦鴛の翅をとばし、兩目兩足のならびたまへる臺は、金の盤鶴の燈をかゝげたり。大方魯般意匠窮めて、成風天に望むにすゞしく、叫首手功をつくせり。

發露人の心に催ほす。見れば又山に曲木あり、庭に怪石あり。地形すぐれたる佛室と云つべし。三壺雲に浮べり、七萬里の浪、池の邊によせ、五城霞に峙てり、十二樓の風、階上に吹く。誤りて、半日の客たり。疑ふらくは七世の孫に逢はんことを。夕に及んで西に歸りぬ。鶴岡にとて鳩宮にまゐらず。朱の玉垣金鏡に映じ、白妙の錦口幣風にそよめき、銀の鐺は朱檻をみがく。錦のつゞれは荘口にひるがへる。しばらく法施奉りて、瑞籬に候すれば、神女がうたの曲は、權現垂跡の隱敎にかなひ、僧侶の經のこゑは、衆生成道の因緣を伸ぶ。彼の法性の雲の上に、寂光の月老たりといへども、若宮の林の間に、應身の風あふぎてあらたなり。

雲のうへにくもらぬかげをおもへども雲よりしたにくもる

月かな

月の光にたゝずみて、石屋堂の山の木末はるかに眺めて、いぶせく歸りぬ。適の下向なれば、遊覽の心ざし切々なれども、經廻わづか一旬にして、上洛すでに五更になりぬれば、名殘のむしろをまきて、出なん事を急ぐ。時に晩鐘のうち驚かせば、永しと思ひつる夏の日も、今日はあへなく暮れぬ。一樹の蔭の宿緣淺からず。拾謁のむつび芳約深き人あり。

きてもとへけふばかりなる旅衣あすは都にたちかへりなん

返し

たびごろもなれきてをしき名殘にはかへらぬ袖もうらみをぞする

五月のみじか夜、時鳥の一聲の間にあけなんとすれば、菖蒲の

一夜のまくら、再會不定のちぎりを結びてでぬ。

かりぶしのまくらなりとてあやめ草一夜の契おもひわするな

湯井の濱を歸りゆけば、浪のおもかげ立そひて、野にも山にも離れがたき心ちして、

なれにけりかへる濱路にみつしほのさすがなごりにぬるゝ袖かな

人を賴みてくだるほどに、たのむ人にはかに上りなんとすれば、身を無緣の境にすてゝ、志を有緣のみちに〔便宜あらば善光寺へ參るべきよし思へり〕遂げばやと存すれども、花京に老たる母あり、嬰兒にかへりて愚子をしたひ待つ。異鄕にうかれたる愚子は萬里をへだてゝ母を思ひおく。抖擻の爲に暇をこひて出

しかども、我を棄つとや恨むらん。無爲に入るは眞實の報恩なれども、有爲のならひは疎きにうらみあり。本よりおもはず、東部の經廻を、今はいよ〳〵急ぐ、西路の歸頭、彼最後の今に逢ふ事は、先世の緣なれば、座したりとも違ひなん。違ふとも來りなん。たゞ契りの淺深によつて、こゝろざしの有無にまかせたり。かなしむらくは、親も老たり子も老たり、いづれか先だち、いづれか後れん。たゞなげく所は、母山の病木、八旬の涯に傾きて、一房の白花いまだ開けざるに、子石の涸れたる苦み、半白の波に溺れて、一滴の雫いまだ汲まざることを。朝に夕に省む、志遂げずしてやみなば、佛に祈り神にいのる。功それいかゞせん。我きく神佛は孝養のために擁護のちかひをおこし、經論は報恩のために讃嘆の言葉をのべたりと。壯齡のむ

かしは將來を恃みて天に祈りき。衰邁の今は先報をかへりみて身をうらむ。もしこれ不信の雲に蔽はれて、感應の月顯はれざるか、もしこれ過去の福因をうゑずして、現在の貧果を得たるか、先報によるべくは、佛の誓ひ賴むや否や、誓願に依るべくは、我孝なんぞ空しき。信否ともに感じて、妄恨みだりにおこる。天眼あひなだめて哀みを垂れ給へ、悲母の目前に中懷を謝して、白髮をおとし、愚子が身の上には本望を遂げず、黑衣をきる事を。夢の間の笋は、たとひ一旦の雪にもとめ失ふとも、覺路の蓮は、かならず九品の露に開きおくらん。子養の子のこゝろざし、口につくす、風樹は風の恨、のこすことなかれ。

いかにせんむすぶ木の實をまたずして秋にはゝそのおつる

山風

東國はこれ佛法の初道なれば、發心の沙彌殊更に修行すべき方なり。この故に木方初發の因地より萌して、金剛極證の果門を開かんと思へり。觀よ夫けがらはしき濱路を過行くだにも、白砂なほおもしろく見ゆ。まして極樂金繩の道、思ひやるにもゆかしけれ。金樹七重の風、無苦の聲をしらべ、紫蓮千葉の色、□□□に染む。功德の池には水煩惱のあかを洗ひ、善根の林には樹菩提の果をむすぶ。ゆゑたる宮殿は十方に飛んで居ながら過ぐ。ことに利生を約諾す。生る人はみな說法集會の場にまじはりて、無量の命を延年し、來るむかしは悉く見佛聞法の室に誇りて、不退の樂に世會す。久遠世々の父母は、珍本覺の如來に顯はれ、過去生々の妻子は、なつかしくて新來菩薩にむすびたり。法喜禪悅の味は口のうちにみち、端嚴殊妙のかざりは身

の上に具はれり。凡そ三十一金の月、胸にはれ、第一義空の水、心にすめり。此故に無始來の眠は夢長くさめ、六趣輪の冥に旨眼ひらけたり、彼無常念王の古鄕を忍ぶちぎり、娑婆にあつく、法藏因位の舊臣と顯はれん志、我等にふかし。此に依て九品覺王の善政をたるゝ、一念奉公の罪、ならびに平等引接の賞にあづかりて、諸天薩埵の僉議を爲す。六賊重罪の犯、却て皆空無漏の旨を奏す。七寶高臺には、四十八願の主、五刼思惟の光を放ちて、念佛の者をてらし、二脇片座には三十三□□尊、大悲弘誓の網をたれて、苦海の沈沒をすくふ。故に三世の佛の濟度にもれたる五逆の罪人も、願海不捨の舟に掉さして彼岸にわたり、十方の土の淨刹にすてられたる此界の惡徒も、大雄起世の翅にかゝりて西天に飛ばん。哀れ疾く生れて道に入らばやな。

なみ風もみのりのこゑをとく聞てみるめくるしきうみを出ばや

まよひきて又まよひこんかりの宿にながくかへらん道にかへらん

東國にさまよひ行く子あり、本の都を別れて假の宿にふせり。西刹に訪尋ぬる母います。あはれ〳〵もとめて彼國に導くを其母といます、佛は三字の名號を子どもに授けて、三因佛性のかくれたるをよび出し、十念の來迎を最期にちぎりて、十地證主の位につく、信力弱き者には、他力を與へてこれを救ふ。倒れふしたる赤子を親の抱くが如し。念緒強き者は願緒にすがりて自からすゝむ、驥につく蠅の千里にかけるが如し。されど具轉の浮身は、一榮の着にすゝめられて、三毒の酒に醉伏す。世路

の嶮難につかれて、佛界の正道におよばず。妻子をおもふ心冥にくらまされて、心佛の光を隔てたり。菩提の鹿は罪業の山にかくれて、駈れどもいまだ出ず、煩惱の虎は功德の林を別れて、追へどもかへらず。睡眠の閨には、あかつきの鐘の聲うち驚かせども、諸行無常の告をさとらず。遊戯の床には、暮の日口口さし驚かせども、分段有爲のことわりを辨へず。老少不定の悲みは、眼にさへぎりて、雲の如くに騒げども、心空にして思はず。先後相違のわかれは、耳にみちて風の如くに響けども、聞つれなくしてあはれまず。老たるは老たれば、いよ〳〵餘命を惜み、若きは若ければ、實に將來を期す。其間山水邈に流れて、俄に口泉にかへり。風煙命滅して忽に冥途にまどふ。又貯へ持つ財は惜めども荷はず、養ひ居る僮僕は哭すれども隨はず。

終に天使にめされて地獄に落ちぬれば、冥路山さかし、嬰兒の歩みにたゞよひてひとり行く。黄泉水はやし、單己のわたりに溺れて身を流す。かなしきかな〳〵、獄卒の呵責にかゝりて後悔魂をくだき、琰王の斷罪にをゝきて前非の舌をまく。惡行はぢを顯はす、鏡の中の影、自業は陳じがたし、札の上の文。嗚呼十八猛鬼の忿怒といかれる聲、天雷の落かゝるが如し。六十四眼の睚眦とにらめる口、熱鐵の迸ばしるに似たり。逃んとすれども逃るにむなし。刄の觸る所、よけんとすれ共よけられず。焰にむせぶ時、心うきかな、猛火の薪となりて、萬億歳罪根山の林夏久し。寒嵐の水に沈んで、無量劫業、報池の水春に別れたり、我等が前罪てゝに謝せずば、後悔又いかゞせん。心あらん人たれか悲しまざらんや。

見ねばにやいたき心もなかるらん聞くも身にたつつるぎばの枝

但極樂西方にあらず、己れが善心のますにあり、泥梨地の底にあらず、己れが惡念の心地にあり、彌陀うとき佛にいまさず、みづからが本有の眞性にあり、獄卒しらぬ鬼にあらず、みづからが所感の業因にあり、雪つもりて山をなす、春の日に當れば消えて殘らず、金くだけて灰にまじる、水に入れて汰れば失する事なし、罪雪ならば□□□□□□□、□□□□□□□善心あらはれぬべし。迷へるときは目をふさぎて、我身をだにも見ず、悟るときは眼を開きて、人の體を見る。障子を隔てゝあなたは、十萬億土と思へども、引あけたればたゞ一間のうちなり。佛性の水煩惱の風に氷れども、おもひとけば誰か知らざらん。貧し

くとも嗟〻べからず、電泡の身にはいくばくの歎ぞや、樂めども傲るべからず、幻化の世にはいくばくのあやまりぞや。たのしみは大驕慢のあだなり、仇はすなはち惡趣に引おとす、貧は又道心のさまたげならず。□□則ち善所に引あぐ。たのしみは先生の怨敵なり、貪着身を縛りて四生の牢獄に罩む。貧は今生の智識なり、愛欲心を放して三界の樊籠を出す、此故に世を厭ふ人は、沙門をなづけて樂しめる人とす。我等八苦の病は重けれども、念佛の藥に癒えぬべし。名利の敵はうかがふとも、非人の身を敵とせじ、上界天人の快樂も心にくからず、過去生々に幾度かうけたる。國王大臣の果報もうらやましからず、流來世々にいくたびか得たる、六趣の栖は、疎みはてたる處なり、九品の都こそ未だ見ねば戀しけれ。こひしくば誰か參らざるべ

き、たま〳〵人身をうけたるは、梵天の□絲□□□針をつけ得たる時なり、佛法の敎木龜眼の語に信じ得る時なり。これだにもありがたしと思はゞ、十方佛土にまた二つなき一乘妙法に生れ遇ひて、十惡をうとまず引接を垂れたまふ阿彌陀を念じ奉るは、口のあればただに唱へゐたるか、耳のあればたゞに聞居たるか。あなあさましのやすさや、無始生死の間に、塵の結緣つもりて泰山となり、露の功德たまりて蒼海と湛へて、善根林をなし、機感時を得て、今生の生死の終りとし、當來を解脫のはじめとする人、此時に生れて此緣にあひたり。故に慈父の長者は貧き子どもの爲に福德の經を說て、化一切衆生とこしらへ、皆令入佛道とよろこび、悲母の敎主はよわき子どもの爲に誓願を發して、此願不滿足と舌を拭ひ、誓不成正覺と口をはく、こ

こに知んぬ、此南浮は西方の出門なりといふ事を。道心はたとひ堅からずとも、慙悔の箒をつかねて常に心を清めん。然らば則櫻花枝にこもり、春の候を迎へて開きなんとす。佛種胸にうづもる、終のときに臨みて宜くきざすべし。抑これは羈中の景趣にあらず、存外のあさき狂言なり。然り而して魚にあらずば魚の心を知るべからず、我にあらずば我志を悟るべからず。駿蹄の千里に馳するも、駑駘の咫尺に塞へぐも、心ざしのゆくほどは至る所違はず。大鳳の雲にかけるを羨みて、小鳥の籬に遊ぶばかりなり、此品家を出し始、道に入りしとき身のあはれに催されて、人の嘲をかへりみず、愚懐のために是を記す、他興の爲にこれを書かず。あざける人、あはれむ人、順逆の二緣ともに一佛土に生れて、一切衆生をすくはんとなり。

ひらくべきむねのはちすのたぐひには春まつ花のえだにこもれる
かはらじなにごるも清むも法の水ひとつながれと汲みてしりなば

海道記終

廻國雜記

道興准后

文明十八年六月上旬の頃、北征東行のあらましにて、公武に暇の事申入れ侍りき。各々御對面あり、東山殿（義政）ならびに室町殿（義尚）に於て、數獻これあり。祝着滿足是に過ぐべからず。

翌日東山殿へ二首の瓦礫をたてまつる。

千さとまで思ひへだつなふじのねの煙の末に立別るとも

旅衣たつよりしぼるむさしの丶露や涙のはじめなるらん

御返し

思ひたつふじの煙の末までもへだてぬこ丶ろたぐへてぞやる

立かへる程をぞたのむ武藏野の露分衣はるかなりとも

室町殿此の御贈答を聞し召し及び侍りて、下されける。

思ひやれはじめてかはす言のはのふじの煙にたぐふものと

は

御使を待たせて取りあへず、

ふじの根の雪もおよばずあふぎみる君が言ばの花にたぐへ

て

禪閤（房嗣）今年は八十五にてましく〳〵けり、此度の行末樣々止めさせ給ひけれども、我身已に耳順ふ齡に及び侍れば、行歩も愈叶ひ難し。かくて徒らに明し暮さむ事もそらおそろしく侍れば、嚴命に應じ侍らぬ事のみ心苦しく侍れど、既に相定め侍る上は力及ばず。去程に馬のはなむけとて、骨肉皆々來り給ふ。

禪閤より使を賜はりて、老屈の時宜にて合期し難く侍れども、餘りに名殘も切に侍れば、是まで皆々の跡を慕ひ侍るよし承りて、盃酌の席に出で給ふ、やゝありて盃のひまによみて給ひける歌、

身は老いぬ又あひみんもかたければけふや限りの別れなるらん

あはれさ肝に銘じて、滿座の老少感涙にたへず、返歌すべきよし侍りしかば、かの在中將が老母、長岡にての故事、ふと心に浮び侍れば、

君がため千世もといのるしるしあらばさらぬ別れを神も憐れめ

同十六日早朝に　長谷の蓬篳を立出で、大原越に赴きけり。年月

馴れし柴の庵、暫しばかりの名殘さへ、立別るゝは心細きを、あだし世の習ひといひ、身既に老後の事なれば、立歸り住居すべしともたのまれず、池の邊にたゞずみて、

住なれしこの山水のあはれわがさそはれ出る行方しらずも

大原まで皆々うち送りに來侍る、中に乘々院法印（經親）神明の拜殿にて、割籠など携へ侍りて、數刻興を催し侍りき、此社頭は伊勢にて渡らせ給ひけるとなん。西山の大原を思ひ出て、神殿に法樂し奉りける。

大原の神は天てるかげながらたのむはる日もおなじ光りを

葛川を一見してよめる。

白露の玉まく葛のかつら川くる秋にしもわれはかへらむ

今宵は朽木に泊りて、いつしか故郷も遠ざかりて、われ人心細

く侍れば、

浮世をばわたりすてゝも山川や朽木の橋に行きかゝりつゝ

これより若狹國小濱にいたる、曹源院といへる禪院に宿す。預てより武田大膳大夫入道申し付られしとなり。彼の寺は先年順禮の時も立寄りける由申す人あり、よくも覺え侍らず。爰に老僧侍り、聊か文才などあるよし見えければ、筆にまかせて、

遠去二城門一成レ客來。巖房何處擁二蘿苔一。曾遊此地都如レ夢。
老衲相迎攀二小臺一。

翌日未明に出侍るあひだ、和韻を見るに及ばず、無殘の至りなり、行印法印といへる法師侍り、專順法眼が同朋なり、古へ連歌の席にて度々逢ひ侍りき。朽木より供し侍るが、善光寺參詣の望みありとなん。小濱に暫く休みて、波をながめて、彼の法

印に申しかけゝる。

かげ涼し立ちよる波の濱ひさぎ

まさご露けき夏のむらさめ　行印法印

同じ國三方といへる處にて、渺々たる海路をながめやりて、

あま小舟となかの浪に漕いでゝみかたの海を四方にみる哉

かくて、こひの松原打過ぎて、浦見坂といへる處にて思ひつゞけゝる。

とはゞやなたが世に誰をうらみ坂つれなく殘る戀の松ばら

この處々を打過ぎて、はたおりの池といへる處に休みて、

蟬の羽の衣に夏はのこれども秋の名にたつはたおりのいけ

越前國敦賀につきけるに、浦のけしき面白く侍れば、暫しながめ侍りて、

はるは又たちぞかへらん梓弓つるがの浦のおきつしらなみ

しらぎどの橋といへる處にて、里人に尋ね侍れども、答ふる者も侍らずして、

里の名もいさしらぎどの橋ばしら立寄りとへば波ぞこたふる

又同じ並びに、高木の里といへる處に、柳の侍りける蔭に、我人涼み　物語りし侍りけるほどに。

里の名を名のるたかきの柳かげ秋風しのぶ夕すゞみかな

加賀國にいたり、たちばなといへる處に宿をかり侍りて、

旅立もさつきの後の身なりけりわれに宿かせ橘の里

洲濱川といひて、其の姿さながら庭などに造りたる洲濱に少しも違ひ侍らず、そのまはり四五町にも餘りぬらんか、奇妙なる

姿なり。里人の侍りしは、相馬の將門作りたりしなど語り侍りき。信用に足らず。

すはま川誰すみすてし遣水の跡とかみまし庭の俤

これより敷地弓波打過ぎて、勵橋とてあやうくいぶせき橋に行きかゝりぬ。

行暮てふめば危きいぶり橋命かけたる波の上かな

同じ國もとおりを通り侍りけるに、人のきぬを織りけるを見侍りて、

誰がもと織そめつらんよろこびを加ふる國のきぬのたてぬき

汐ごしの松を尋ね侍りて、

年なみの外にもたかき汐ごしの松のむかしぞ汲みて知らる

る

ほとけの原といへる處を過ぎ侍るとて、

わがたのむ佛の原に分き來てぞ行ふ道のかひも知らるゝ

吉野川といへる處にいたりてよめる。

妹脊やまありとは聞かず夏にしもよしのゝ河の名に流れつつ

白山禪定し侍りて、三の室に至り侍るに、雪いと深く侍りければ、思ひ續け侍りける。

しら山の名にあらはれてみこしぢや峰なる雪の消る日もなし

下山の折ふし、夕立し侍りければ、

ゆふだちの雲はしらねの雪げかな

是より吉岡といへる處に暫く休みて、

旅ならぬ身もかりそめの世なりけりうきもつらきもよしや

吉岡

下白山といひて、本の白山の麓に、劔といへる處侍り。そのかみ劔飛び來しより、此の名をのこしけるとなん。

しら山の雪のうちなる氷りこそふもとの里のつるぎなりけれ

今宵は矢矯のさとゝいへる處に宿りけるに、曉の月をながめて。

こよひしも矢はぎの里にゐてぞ見る夏も末なる弓張のつき

明れば、野の市といへる處を過ぎ行けるに、村雨に逢ひ侍りて、

風おくる一村雨に虹きえて野の市人はたちもをやまず

津幡といへる里に宿りけるに、住む人も稀にて、殊の外に閑素

に侍りければ、

旅人の枕の上におく太刀のつばたのさとはさび渡りけり

同じ國高松といへる處に行暮れて、煙のたつをながめやりて、

すむ人のたのむ木蔭やそれならん煙にくるゝ高松の里

これより能登國に到り侍りて、菅原といへる處にて、

伏見にはあらぬ野山を分過ぎて今宵かりねをすが原の里

又杉の屋といへる處を通るとて、

待つ人の思ふしるしは見えねども訪はではいかゞすぎのやの里

よつ柳といへる處に柳のあまた侍りければ、立寄りて、

里人の鞠の庭にはしめねどもいとなつかしきよつ柳かな

小金森といへる處にて、しばらく休みて、

みちのくの山に花さくこがね森此里までも種やまきけん

藤井といへる處は、浦近き里なりければ、波を見てよめる。

浦ちかき宿りをしめて春ならぬ藤井のさとも波になれつゝ

久江の谷内といへる處にてよめる、

心がらうきすまるにも馴れぬらん八千たび何をくゐの里人

石動山に參詣して法樂し奉る。

うごきなきみ世にかはりて石動の山とは神や名づけそめけん

かくて越中國に至り、長煉の森といふ處にて、

年なかばながれの杜に立ちよれば老の涙もその名なりけり

ねりあひといへる里に、野人ども物語りしけるを見て、ある同行にざれごと歌を、

足よわき老のちからに伴ひておきなもこゝにねり合の里

岩藏川といへる大河侍り、故郷長谷近きその名を思ひ出て、

故郷のやまにちかしとこひわたる岩くら川の影もなつかし

大森といへる處を過ぎけるに、殘暑未だ散じやり侍らねば、吾人木陰にすゞみとりて、

風はもり照る日はうとき大森のかげに立よる初秋の空

かくて立山に禪定し侍りけるに、先づ三途川に到りて、思ひつづけゝる。

この身にて渡るもうれしみつせ川さりとも後の世にはしづまじ

翌日下山の序に、もろ〳〵の地獄を廻りけるに、熱湯の體火炎など取々に淺ましかりければ、

しでの山その品々や湧き返る湯だまに罪のかずを見すらん

禪定する〳〵ととげて下向し侍る道にて、

都をば遠くこしぢにかへる山ありとなぐさむ旅のそらかな

宮崎を立て、界川、たもの木、風喰、砥並、黑岩などいふ處を打過ぎ、駒がへりといへる處にて、

行末をいそぐとすれど跡にのみ心をかくるこまがへりかな

やまと川にてよめる。

漕舟のさをの山べは遠けれど名に流れたる大和川かな

七月十五日。越後の國府に下着。上杉兼ねてより長松寺の塔頭貞操軒といへる庵を點じて、宿坊に申付け、相摸守路次まで迎へに來たり、七日逗留。毎日色をかへたる遊覽ども侍り。爰を立侍るとて、二首の詠を殘しとゞむ。

千歳へんしるしを見せて此宿の軒端にたかき松の村立

日數へてなれぬる旅のなか宿も名殘はつきじ都ならねど

府中を立て長濱といへる處に休みて、

行末のみちをおもへば長濱の眞砂を旅のうきかずにして

柏崎を過ぎけるに、秋風いと烈しく吹きければ、

おしなべて秋風吹けばかしは崎いかゞ葉もりの神は住むらん

相見川、かさ島など打過て、鯨波といへる濱を行きけるに、折節鯨の潮を吹きけるを見て、

わきてこの浦の名にたつくぢら波曇るうしほを風も吹くなり

安田、山室、見置、澁川、大か井、木落など打過ぎて、漆山を

越ゆとて、

初あきの露にぬるてふ漆山今ひとしほぞ風もすゞしき

壺池といへる里にしばし休みて、或人に遣はしける俳諧歌

あぢ酒をすゝむる人もなきやどに水のみわくや壺池のさと

これより、くつぬぎといへる里を過ぎ侍るとて、

我もまたあしを休めてたちぞよる水かふこまのくつぬぎの

さと

吹露といへる里にて、寢覺に思ひつゞける。

この里のあるじがほにも名のる也深き梢のふくろふのこゑ

相俣、湯の原、池の原などいふ處を分け行き侍りけるに道のほとりの尾花をながめやりて、

すむ水はありとも見えぬ池のはら尾花さわぎてたかきなみかな

此原を打過ぎて、薙刀坂といへる處をこゑ侍るとて、又ある同行にいひかけ遣はしける俳諧歌

枝をだにおもしといとふ山こえて薙刀坂を手ぶりにぞ行く

上野國大藏坊といへる山伏の坊に、十日餘り止まりて、同國杉本といふ山伏の處へ移りける道に、烏川といへる川に、鵜烏など相交りて侍りけるを見て、又俳諧、

とりもえぬ魚のこゝろを耻ぢもせで鵜のまねしたる烏川哉

大が松といへる處を過ぎ侍るとて、

名のみして宮木にもるゝ大が松ひく人なしに年や經ぬらん

この處より、信濃の淺間の嶽近々と見え侍ると聞きしにも過ぎて其風情勝れ侍りき。

今はよにけむりをたえて信濃なるあさまの嶽は名のみ立ちけり

杉本に十日許り逗留し侍りき、八月十五夜淡雨茫々として、いとゞ旅店の物うさも、一入のこゝちして、

身こそかく旅のころもに朽はてめ月さへなほもやつす雨哉

此の坊を立て、宮の市、瀬下の原、鹽川、白石、板倉野、鮎川、神長川など様々の名所を行き〳〵て、小しまの原といへる處に休みてよめる。

けふこゝに小しまの原をきてとへばわが松島は程ぞ遙けき

武藏野にて殘月をながめて、

山遠し有明のころひろ野かな

おなじ野をわけくれてよめる、

草のはらわけもつくさぬ武藏野のけふの限りはゆふべなりけり

此の夜は此野に假寢して、色々の草花を枕に片しきて少しまどろみ、夢のさめければ、

花ちりし草の枕の露のまに夢路うつろふむさしの〻原

武藏野の草の假寢の秋の夜は結ぶゆめぢもはてやなからん

此の野の末にあやしの賤の屋に泊りて雨を聽きて、

旅まくら都に遠きあづま屋を幾夜か秋のあめになれけん

岡部の原といへる處は、彼の六彌太といひし武夫の舊跡なり。近代關東の合戰に數万の軍兵討死の在所にて、人馬の骨をもて塚につきて、今に古墳數多侍りし、暫く回向して口にまかせける。

なきをとふ岡べの原のふる塚に秋のしるしの松風ぞ吹く

村君といへる處を過るとて、

誰か世にかうかれそめけん朽はてぬその名もつらき村君の

里

淺間川を渡るとてよめる、

名にしおふ山こそあらめ淺間川行く瀬の水も烟りたてつゝ

古川といふ處にて舟にのり、

こがくれに浮べる秋の一葉ぶねさそふあらしを川をさにし

て

河舟をこがのわたりの夕波にさしてむかひの里やとはまし

中田と云へる處にて、初めて富士をながめて、

言のはの道もおよばぬ富士の根をいかでみやこの人に語ら

ん

夕あけぼのに、眺めの變れることを、

俤の替るふじの根時しらぬ山とはたれかゆふべあけぼの

彼の嶽は、遠く行くに隨ひて、空にも及ぶ許りに侍りければ、

遠ざかりゆけば間ぢかく見えてけり外山を空にのぼるふじ

の根

下總國郡の山といへる處に、伊豆の三島を勸請し奉りて、大社

まし〳〵けり、彼の別當の坊に暫く逗留し侍りけるうちに、歌

など度々言捨てども、少々記し置き侍りける、

尋ねきてこゝに三島のおなじ名を思ひぞ伊豆の國つかみか

せ

ある夜鮫わたるに士峰の雪嬋娟たりければ、

富士の根の麓に月はかげしろしそらに冴たる秋のしらゆき

蟲の音物すごき夜、寢ざめがちにて、

かりねとふ草の枕のむしのねにもよほされてもなき明しつつ

ある夕つ方、初雁の聲をきゝて、

おくれゐて聞きこそわぶれ初かりのみやこにいそぐ夕暮のこゑ

おなじ時、發句

雁なきて秋風たかき雲路かな

色こき蔦の、夕日に映じけるを見て。

色うすき秋のひかげは紅のながめも替るつたかつらかな

野外の萩やう〳〵散りがたに見えければ、遠山には、木々の梢

色つき渡りけるを見て、

のべの萩ちれば外やまの錦かな

旅館の萩をながめ侍りて。

萩見ればふるさと近き軒端かな

かくて、こほりの山を立出てゆく道に、葛のいと繁く侍りけるを見て、

我がかたに歸らんことも遠き野のまくずうらやむ秋かぜのくれ

又すゝきを分け侍りて、

思ひいづる故郷人のこゝろかとまねく尾ばなが袖もなつかし

同じ野を分けすぎけるに、紫苑といへる花を見て、

尋ねみん安達がはらのしるべかも此野にあへる鬼のしこぐさ

宮城野の萩とて人の見せければよめる。

みやぎ野の木の下ぶしの假まくら眞萩をりしき獨りかもねん

ある旅宿にて、明方に雁のなきけるを聞きて、

しの〻めの横雲まよふみね越えてともにたなびく天つ雁がね

ある人す〻め侍りける。

旅天月

よな〳〵の月は都のかげながらやつる〻そでに面がはりして

夕鹿

我かたを戀ひつ〻聞けばさを鹿の妻とふこゑもうき夕かな

旅店にて愁懷のあまり、夜更るまで短檠に對して、

孤館殘燈欲二五更一。暗壁切々夢難レ成。故人記取不平事。
日々寒垣想二洛城一。

山を越過ぎて浦近くながめやりけるに、遠景限りなく見えければ、感興にたえず、和漢兩篇口に任せ侍る。

客旅尙湊雙鬢花。江山阻レ跡故人遐。孤帆明滅暮烟外。
落日天邊雁陣斜。

からろおす船を友とやこゑを帆にあげて落ちくる天つ雁がね

上總國千種の濱といへる處にて、色貝を拾ひて、

野路つゞくちぐさの濱のうつせ貝うみさへ秋の色に出でけり

櫻井の濱といへる處にて、さくら貝を拾ふとて、

春はさぞはな面しろく櫻井のはまにぞ拾ふおなじ名の貝

吉野郷といへる處あり、宗尊親王、芳野の花をこゝに植ゑさせ給ふと言ひ傳ふ。

花ざかり思ひやられてみよしのゝさくらの紅葉是も名殘りと

富津、木更津、吾嬬など云へる處を打過ぐるとて、思ひ續けしこと、口に任せて俳諧

爰にふときさらづの里すぐれども猶もあづまの中とこそきけ

神野山といへる道場にまうでゝ、

なく鹿の山にも野にもきこゆなり妻戀ひわぶる秋のゆふぐれ

安房國清澄山にまうで、通夜し侍るあかつき、

曉のたれときぼしもきよすみの海原とほくのぼる山かな

東の方へ下山し、天津といへる處にて、

昔もし雲の通ひぢふきとぢば乙女のすがた今も見ましを

前原といへる處にて、

まへ原の里のうしろのやまおろし舟にもみぢの錦つむなり

磯村といへる處は、名にしおひて、磯傳ひの村なれば、

海ちかくいそ傳ひゆくいそむらに村々見ゆるあまの釣舟

那古の觀音に詣で、ぬかづき終りて、夕べの海面をながめやる

に、寺僧の出で來て、あれ見給へ。入日を洗ふ沖津白波とよめるは、この景なりと云へり。されど、それは津の國住吉郡なごの浦をよめるとかや、其のなごの浦に難波津を守れる人の住みしによりて、その浦を津守の浦といひ、又其の子孫の氏によびて津守氏ありとかや。今はなごの浦の處に、さだかに知れる人なしとなん。この歌何地にしてよめるも知り難けれど、寺僧の云ふに任せてしるす者なり。誠に今も入日を洗ふ沖つ波、眼前の景色えも云ひがたし。

那古の浦の霧のたえまにながむれば爰もいり日を洗ふしらなみ

今宵はこゝに通夜し、明くるあした、名にしおふ野島が崎を見れば、朝霧こゝかしこに立消るさまたゞならず。

あさ小舟見えつかくれつ朝あけの野じまがさきの霧のむら〳〵

勝山と云へる處にて、

駒はあれどかちよりぞ行くかち山の里にこはたそ思ひやらるゝ

河名と云へる處にて、里人の菜を洗ふを見て、

つみためて洗ふ河なのさとびとよ誰があつものゝ供へにやなす

此所より右の方に鋸山といへる山あり、峰のあらしに雲晴れて、あからさまに其の嶺見ゆ、段々ありて、誠にのこぎりの様になん侍れば、俳諧、

宮木ひく峰のあらしに雲晴れてのこぎり山はがゞりとも見ゆ

これより舟にのりて、三崎と云へる處に上りて、

あはれとも誰かみさきの浦づたひ潮なれごろも旅にやつれて

浦川の港と云へる處にいたる、こゝは昔し頼朝卿の鎌倉にすませ給ふ時、金澤、榎戸、浦河とて、三つの港なりけるとかや。

えの木戸はさしはりてみず浦がはに門をならべて見ゆる家々

鎌倉にて第三まで獨吟。

霧ふかし鎌くらやまの星づき夜

あさなく鶴が岡のまつかぜ

葛の葉の色づく野澤みづかれて

鳥はみと云へる處を過ぎ行きけるに、日暮れ侍りければ、

さそはれて我もやどりに急ぐなり歸る夕べのとりはみの里

九月九日、野を分けつくして山に到りけるに、菊いと面白く咲て、感緒きはまりなし、重陽宴には菊を擬し侍りて、

けふは又野を分過ぎて仙人と成りてやきくの花をかざゝん

長月のこゝのがさねをおもひ出てころもにうつす菊の白露

佐野の舟ばしをよめる。

かよひけん戀路を今の世がたりに聞きこそ渡れさのゝ舟橋

日光山に登りてよめる、又むかしは二荒山と云ふとなん。

雲きりもおよばで高きやまの端にわきて照そふ日の光り哉

此の山に、山菅の橋とて深秘の子細ある橋侍り、委しくは縁起に見え侍る、又顯露に記し侍るべき事にあらず。

法の水みなかみ深くたづねずばかけても知らじ山菅の橋

瀧の尾と申し侍るは、無雙の靈神にてまし〳〵ける、飛瀧のすがた目を驚かし侍りき。

世々を經てむすぶ契りの末なれや此の瀧の尾のたきの白糸

此の山の上三十里に中禪寺とて、權現ましましける、登山して通夜し侍り。今宵は殊に十三夜にて、月もいづくに勝れ侍りき。渺漫たる湖水はべり、歌の濱といへる處に、紅葉色を爭ひて月に映じ侍れば、舟に乘りて、

敷しまのうたの濱べに舟よせて紅葉をかざし月を見る哉

翌日中禪寺を立出ける道に、數ちりしける紅葉の、朝霜のひまに見えければ、先達しける衆徒の堅者といへる者にいひ聞かせ侍りける。

山ふかき谷の朝霜ふみ分けてわがそめいだす下紅葉哉

かくしつゝ下山し侍りけるに、黑髮山の麓を過ぎ侍るとて、吾人言捨どもし侍りけるに、

ふりにける身をこそよそに厭ふとも黑髮山もゆきを待つらめ

同じ山の麓にて、迎ひとて馬どもの有りけるを見て、

日數へて乘る駒の毛も替るなり黑髮山の岩のかげみち

又本坊坐禪院に歸り着き侍りて、さま〴〵の遊覽あり、ある夜時雨を聞きて、

越えゆかんをのへの雲もさきだちて山めぐりする初時雨哉

軒近く瀧落ち侍り、さながら寢覺の時雨に聞きまがひ侍りければ、

山水の音をねざめの時雨にて老のなみだはいつはりもなし

ある夜月いとおもしろかりけるに、別當坐禪院法印昌深方より詠みて給ひける、

さても猶思はぬ袖のかりねゆゑこよひや都つきの山ざと

とりあへずかへし、

言の葉の光りをそへて見る月によしや都の秋もしのばじ

一山の老弱酒宴を興行して、稚兒童數輩集まりて、色々曲を盡し侍りき、宴席終りて、藤乙丸といへる少年、休所へ禮に來りて、暫く物語りし侍りて歸りけるが、次の日言遣はしける。

音にぞと云ひしもさぞな相見ての心づくしを誰かしらまし

藤乙丸かへし、

相見しは夢かとばかりたどれるをうつゝに返す言のはの末

ある夜又彼の兒おとづれ侍りて、餘りに月の面白さに誘はれ侍

る由申して、しばし物語りし侍りけるに、一首よみ侍るべきよし、強て所望しければ、とりあへず、

月見つゝ思ひいでなばもろともにむなしき空やかたみなら

まし

名殘もけふ明日ばかりにて侍れば、更け行くをも知らず遊びけるに、五更の鐘既に告げ渡りければ、歸りて長門の豎者して申しおこせける、

いかにせん又頼みある世なりとも秋の別は愚かならめや

かへし

藤乙丸

わかれ路のつゆとも消えん時もあれ秋やは人にとのみなげ

きて

廻國雜記

添へてつかはしける歌。

忘れめやひと夜の夢のかりまくら人こそかりに思ひなすとも

同じ國宇都宮につき侍り、粉川寺といへる處に聖道所あり、此坊に留まり侍りき、此等の稱號はいかなる由來にかと思ひ侍りければ、紀伊の國粉川寺を移し侍るとなん。彼の本寺門跡管領の在所なれば、不思議なる機緣にて侍るよし申しきかせて、短尺を遣はしける、

契りあれやあづま路とほく紀の國にあらぬこがはの寺に宿れる

ある夜擣衣の音をきゝて、

ねざめうき旅のよどこを思ひやれ衣を宇都のみやのさと人

この旅宿にて、人々月の歌よみける中に、

めかれせず月にかゝるは心にてそらに雲なき秋の夜半哉

宇都宮を立ちて、きぬ川と云へる處にてよめる。

もみぢ散る山はにしきをきぬ川に立ち重ねたる波の綾哉

常陸國に到りぬ、小栗といへる處に熊野の御社おはしましけり。法施の序によみて奉る。

たちそひて守る心の道なれやいづくに來ても三熊野の神

櫻川を渡り侍りければ、紅葉うつろひて波に映じけるを見てよめる。

秋の色にうつろひきても櫻がはもみぢに波の花をそへつゝ

同じ國山田慶城といへる山伏の坊に宿りてよめる。

めぐり來てけふは吾妻の常陸帶結びそへてや草枕せん

この坊に逗留の間、歌あまたよみける中に、夕時雨と云へる題にて、

紅葉ばを染るのみかは夕しぐれ我がさびしさも色勝りけり

又夜時雨といへる心を、

色みえぬしぐれのいとや山姫のよるの錦を織り亂すらん

九月廿三日。欲レ詣二筑波山一。疾風迅雨太矣。仍龜二居草廬一而口二號一絶。

蕭條竟日鎖二柴門一。風雨似レ憐二吾脚跟一。還恨楓林斷二秋色一。明朝山上祭二吟魂一。

翌日筑波山に參詣し侍りけるに、初雪ふりて、もみぢ薄くれなゐに見えければ、

いづれをか深し淺しとながめましもみぢの山のけさの初雪

神前にて詠じて奉りける。

さはりなくけふこそ玆に筑波根や神のめぐみのはやま繁山

誠にこのもかのもと詠ぜしも道理にて、山々の紅葉、譬へん方も侍らず、道すがら口ずさびける歌。

筑波山このもかのもの紅葉に時雨もしげきほどぞ知らる

る

みなの川は此山の陰に流れ侍る。戀ぞつもりてと詠ぜし歌を思ひ出でゝ、

つくば根のもみぢうつろふみなの川淵より深き秋の色かな

又山に八重重と云へる靈石はべり、云ひすての發句。

きてぞ見る紅葉のにしき八重がさね

旅宿にて、夕鹿といへることを、人々によませ侍りける次に、

山蔭や木の葉しぐれて暮るゝ日に忍び難たる小男鹿の聲

雁のわたりけるを聞てよめる。

萩のはに有りと知らでや玉づさを翅にかけて渡る雁がね

曉蟲といへることを、

きりぐすよわるね覺めの有明に枕さびしき床のうへかな

旅の宿さびしさの餘り、これかれ題を探りて歌よみけるに、鹿。

なるこにて驚く鹿も妻戀ひの絆になどか離れざるらん

筑波根の麓を立て、他國へ移りける道にて、菊紅葉おもしろき處にいたりて、

旅のそらうつろひかはり行くみちに紅葉も菊もをりを知れとや

筑波川をわたりけるに、いさゝの橋を過ぐるとて、

渡りきて末たどゞし筑波川いさゝの橋にかゝる夕ぐれ

爰をすぎて、鵜飼川といへる處に、もみぢ盛に見えければ、立寄りて、

かゞりをば紅葉ぞてらす鵜かひ川水すさまじきせゞの秋かせ

ある野徑を分行けるに、淺茅いと深かりければ、

ふるさとの庭の淺茅もかくやとて分けわぶる野を哀とぞ見る

九月廿八日。稻穗の別當が坊にて、湖水をながめて。

山色湖光秋又窮。鄉書曾不レ託二飛鴻一。砧聲近報孤村晚。

旅懷何堪愛患躬。

下總の國兒の原と云へる處あり、いかなる故に、かゝる名の處

ば侍るぞと、里人に尋ねければ、この在所は白波青林横行の地たるによりて、ある少年の通りけるに、衣裝など剝ぎとるのみならず、剩さへ殺害し侍りき、夫より此所をかやうに號し侍るよし語りければ、今更の心ちして、塚のほとりに立寄りて、思ひつゞけて廻向し侍りける。

佳人落レ命荒原上。蘚底古碑空刻レ名。勿レ恨青林犯二花影一。
浮生有レ限辱兼レ榮。白波にうき名をながす稚兒の原戀路にすつる身とも聞かばや

草の原さま〳〵枯渡りて、虫の音處々に殘りけるを、

蟲のねの稀に成り行く野邊見ればひとりは枯れぬ霜の下草

或時題をさぐりて歌よみけるに、菊、

むらさきにうつろふ菊の花はまたあらぬ種より咲くかとぞ見る

又砧を、

秋風にひとの夜さむをうちぞへて砧にあやな寢覺めをぞする

ある少人の許より、暮秋紅葉といへる題をたびて、歌よみてと侍りしかば、その使を待たせて、

歸るさをおもひたつ田の秋とてや山も錦の折を知るらん

ある夕ぐれに、雁なきて秋風物すごく吹きなしければ、

露路行くかりがねさむみ秋ふけてゆふべの山にかぜ渡りつつ

國々あまた過行き侍りけれども、富士の高根猶同じさまに見え

たりしかば、

身にそふる俤なれやいづかたに行けども近き富士のたかね

は

晴れくもる時雨の空に向ひて、旅客の愁の泪に思ひよそへてよめる。

うき秋のなみだの袖は隙ぞなき時雨は空にはれくもれども

九月盡にある旅宿にて、

いかにせむけふを限りの秋ながらわが歸るさの行方知らね

ば

旅のそら我はいつとも白露をかたみに置て歸る秋かな

十月朔日。よみて人につかはしける。

春といふ名にはふれども神なづき時雨てかすむ山の端もな

し

けふよりは春と冬との神無月げに定めなきはつしぐれかな

けふ小春の驗にや、聊か長閑に侍りければ、皆々稻穗の湖水に浮びて舟の中にて酒など興行し侍りき。ふじの根湖にうつれる心を、皆々よむべきよし申しければ、

水うみの波間にかげをやどしきて又たぐひある富士をみる

哉

歌穗をたちて行きける道に、いろ〳〵の名所ども侍り、いひ捨ての發句歌など、あまた侍りしかども、途中のことなれば記すに及ばず、怪しの橋といへる處にて、

川かぜのわたる霧間にほの見えてあやしの橋の末ぞあやふき

岩つきと云へる處を過ぐるに、ふじの根には雪いと深く、外山には殘る紅葉色々に見えければ、よみて同行の中に遣はしける。

ふじの根の雪に心をそめて見よとやまの紅葉いろふかくとも

淺草といへる處に泊りて、庭に殘れる草花を見て、

冬のいろはまた淺くさのうら枯れに秋のつゆをものこす庭哉

この里のほとりに、石枕といへる不思議なる石あり、其故を尋ねければ、中比のことにやありけんなまさぶらひ侍り、娘を一人もち侍りき、容色おほかた世の常なりけり、彼の父母、むすめを遊女にしたて、道行き人に出でむかひ、彼の石のほとりに誘ひて、交會の風情を事とし侍りけり、兼てより合圖の事なれ

ば、折を計らひて、彼の父母枕のほとりに立寄りて、共寢したりける男の頭を打碎きて、衣裝以下の物を取りて、一生を送り侍りき、さる程に彼の娘つや〳〵思ひけるやう、あな淺ましや、幾ほどもなき世の中に、かゝる不思議の業をして、父母もろ共に惡趣に墮して、永劫沈淪せんことの悲しさ、先非に於きては悔ても益なし、是より後の事さま〴〵工夫して、所詮我父母を出しぬきて見んと思ひ、ある時道行く人ありと告げて、男の如くに出立て、彼の石にふしけり、父母はいつもの如くに心得てかしらを打碎きけり。急ぎ物ども取らんとて、引被ぎたる衣をあげて見れば、人ひとりなり。怪しく思ひてよく〳〵見れば、我が娘なり。心もくれ惑ひて、淺ましともいふ計りなし。それより彼の父母速かに發心して、度々の惡業をも慙愧懺悔して、

今の娘の菩提をも深く弔ひ侍りけると語り傳へけるよし、古老の人の申しければ、

罪とがのくつる世もなき石枕さこそは重き思ひなるらめ

當處の寺號淺草寺といへる、十一面觀音にて侍り、たぐひなき靈佛にてまし〳〵けるとなん。參詣の道すがら、名所ども多かりける中に、まつち山といふ處にて、

いかでわれ頼めもおかぬ東路のまつちの山にけふは來ぬらん

しぐれてもつひにもみぢぬ待乳山落葉をときとこがらしぞ吹く

淺茅が原と云へる處にて、

人目さへ枯れてさびしき夕まぐれあさぢが原の霜を分けつ

つ

おもひ川にいたりてよめる、

うき旅の道にながるゝ思ひがはなみだのそでや水のみなか

み

かくて隅田川のほとりに至りて、皆々歌よみて披講などして、古への塚の姿哀れさ、今の如くに覺えて、

ふる塚のかげ行く水のすみだ川きゝ渡りてもぬるゝそでかな

同行の中に、さいえを携へける人ありて、盃酌の興を催し侍りき、猶行き〳〵て川上に到り侍りて、都鳥尋ね見んとて人々誘ひける程に、まかりてよめる。

言とはん鳥だに見えよ隅田川みやこ戀ひしとおもふゆふべ

に
思ふひとなき身なれども隅田川名もむつまじきみやこ鳥か
な

やう〳〵歸るさになり侍れば、夕の月ところがら面白くて、舟をさしとめて、

秋の水すみだ川原にさすらひて舟こぞりても月を見る哉

次の日淺草を立て新羽といへる處に趣き侍るとて、道すがら名所ども尋ねけるうちに、忍の岡といへる處にて、松原の有りける蔭に休みて、

霜ののちあらはれにけり時雨をば忍びのをかの松もかひなし

こゝを過ぎて、小石川といへる處にまかりて、

我かたを思ひふかめて小いしかはいつをせにとか戀渡るらん

鳥越の里と云ふ處に行きくれて、

暮れにけり宿りいづくと急ぐ日になれもねに行く鳥こえの里

芝の浦といへる處に至りければ、鹽屋の煙り打靡きて物寂しきに、鹽木運ぶ舟ともを見て、

やかぬより藻鹽の煙り名にぞ立つ舟にこり積む芝のうらびと

此の浦を過ぎて荒井といへる處にて、

蘆まじりおふるあらゐの打なびき波にむせべる岸のまつかぜ

丸子の里にてよめる、

あづまぢのまりこの里に行きかゝり足も休めずいそぐ暮かな

駒林といへる處に到りて、宿をかり侍るに、淺ましげなる賤の伏屋に、落葉處をせき侍るを、ちと掃きなどし侍りける間、たゝずみて思ひつゞけゝる、

つながれぬ月日しられて冬きぬと又はをかふる駒ばやしかな

新羽を立て鎌倉に到る道すがら、さまゞの名所ども、委しく記すに及び侍らず、帷子の宿といへる處にて、

いつ來てか旅のころもをかへてをす風うらさむきかたびらの里

岩井の原を過ぐるとて、

すさまじき岩井の原をよそに見て結ぶぞ草の枕なりける

もちひ坂といへる處にて、俳諧の歌、

行きつきて見れども見えずもちひ坂たゞわら屑に足をくはせて

すりこばち坂といへる處にて、又俳諧をよみて、人に見せ侍りける。

ひだるさに宿いそぐとや思ふらん道より名のるすりこばち坂

放れ山といへる山あり、誠につゞきなる尾上も見え侍らねば、

朝まだき旅立つさとのをちかたに其名もしるきはなれ山かな

鎌倉中、かなたこなた順見し侍りて、先づ谷々を人に尋ね侍り。

鶴がゐの谷にてよめる、

いくちとせ鶴が岡べにともなひてよはひあらそふ鶴がゐの

やつ

扇が谷にて、

秋だにもいとひし風を折しもあれ扇がやつは名さへすさま

じ

うつし繪の扇がやつや是れならん月はうなばら雪はふじの

ね

さゝめがやつ、

霜さやぐさゝめがやつのふしの間に一夜のゆめも嵐ふくな

り

梅が谷、

冬がれの木立さびしきうめがやつ紅葉も花もおもかげぞな

き

うりが谷、

ひと夏はとなりかくなり暮過ぎて冬にかゝれるうりが谷か

な

霧がやつ、

此の里のふる井のもとの桐がやつおちばの後はくむ人もな

し

胡桃が谷、

住なれし鎌倉山のやまがらやくるみが谷に秋をへぬらん

べにが谷を通りて、化粧坂を越ゆとて、俳諧、

かほにぬる紅が谷よりうつりきてはやくも越ゆる化粧ざか
かな

鶴が岡の八幡宮に參詣し侍れば、傳へ聞き侍りしにも勝れたる宮だちなり、誠に信心肝に銘じて尊とく覺え侍る。抑當社別當祖師隆辨僧正は、經歷年久し。その階弟道瑜准后は、號をば大如意寺といひ、兩代彼の職に補し侍りき。由緒無双なることを思ひ出でて、神前に奉納の歌、

神もわが昔の風をわすれずばつるがをかべのまつと知ら
なん

由井が濱にまかりて、鳥居など見侍りて、暫く皆々あそび侍りけるに、

くち殘る鳥居のはしら現はれて由井の濱べにたてる白波

この序に建長圓覺以下の五山を順見し侍りて、これより瀬戸金澤と云へる勝地に侍るを尋ね行くに、瀬戸の沖に漁舟あまた見えけるを、

よるべなき身のたぐひ哉なみあらきせとの汐合わたる舟人

磯山づたひ、殘のもみち見所多かりければ、

冬ざればせとの浦わのみなと山いくしほみちて のこるもみぢぞ

金澤にて、時宗の庵の侍りけるに、立よりて茶を所望しけるに、庭に殘菊の黃なるを見てよめる

誰こゝにほりうつしけん金澤や黃なる花さく菊の一本

此の在所に稱名寺といへる律院はべり、殊の外なる古所にて、伽藍などもさりぬべきさまなる、處々順禮し侍りけり。三重の

塔婆に詣でけるに、老僧に行き逢ひぬ。この塔の由來など尋ねければ、これこそ楊貴妃の玉の簾二かけ安置し侍れ。我が計らひにて侍らましかば、一見させ侍るべき物をとて、懇切なる芳志ぞ見え侍りき。既に下向せんとしけるに、この僧色々に思案して申すやう、暫く相まち侍れ、住持に申し試みんとて、僧立入りぬ。やゝありて立歸りて云ふやう、此の玉簾は當寺の靈寶として、毎年三月十五日に取出すより外には、堅く禁制し侍れども、拙老綱廻の義前後其の例あり難く侍れば、衆僧談合しはべりて、一見を許し侍るべきよし申す。誠に不思議なる機緣なり。簾の長さ三尺四寸、廣さは四尺ばかりにて、水精の細さ、世のつねの簾よりも猶ほ細く、形は見えはべらず。貴妃のその古へに、九花帳にかけ侍りけん事など思ひやり侍れば、千古の

感緒今さら肝に銘じて、皆人袖をぬらし侍りき。

遠き世のかたみをのこす玉すだれ思ひもかけぬそでのつゆ

哉

藤澤の道場、聞えたる處なれば、一見しはべりき ある寮にて茶を所望し侍り。暫く休みけるに、池にもみぢの散りけるを見て、

澤水もかげは千いろの木の葉かな

道場の前に古りたる松に藤のかゝりければ、

紫のいろのゆかりの藤さはにむかへの雲をまつぞ木高き

こゝを立て、小田原といへる處へまかりける道に、花水川といへる河を渡りて、

咲くと見えちるとみゆるや風渡る花水川の波のしらたま

大磯の宿といへる處は、古へ虎と云ひける好色の住みける處となん。ある同行に戯れに申しきかせける、

今は又虎ふす野邊とあれにけり人はむかしの大いその里

鳴立澤と云ふ處に至りぬ。西行法師こゝにて、心なき身にも哀れはしられけりと詠ぜしより、此處をかくは名づけゝるよし、

里人語り侍りければ、

哀れしる人のむかしを思ひ出てしぎ立つ澤を泣く〳〵ぞ訪ふ

梅澤の里を過ぎ侍るとて、

旅ごろも春まつこゝろかはらねば聞くもなつかし梅澤の里

丸子川にて、俳諧、

すゞかけのくゝりをあげて鞠子川おひつながいつけふは暮らさん

小田原に着きはべれば、早川の浦とて、水上は大河にて、海邊に續きたるによりて、かやうに申し侍るとなむ。

末とほくながれ出たるはやかはの浦や千尋の波路なるらん

一夜此の處にとゞまりて、旅泊の愁緒かへりて其の興も多かりけり。終夜まどろまん隙も侍らざりければ。

あしのやは波をまくらに敷たへの床には夢のたちも歸らで

是より箱根三島などへ參詣せんとて、風祭りの里と云へる處にて、渡し舟さしよせける時、

舟出せむみなと江ちかき里の名もげに白波のかざまつり哉

箱根山に行き暮れて今夜は社參におよばず翌朝まうでゝ落葉を見て、

こがらしの錦をたゝむ箱根山あけて見るにぞ紅葉なりける

嵐ふくをのへの紅葉散みだれ錦をたゝむはこねやま哉

かくて三島にまうでゝ、

波たゝぬ御代にといのる三島江のあしてふことをはらへ

神風

矢立の杉とて大木あり。軍陣へ出る武士共、此木に矢を射たてゝ吉凶を見侍るよし傳へければ、

ものゝふのためしにひける梓弓矢立の杉やしるしなるらん

足高山をながめて、

浮雲のあしたか山ははやけれどなづめる駒ぞすゝむ共なき

桂山をこえ侍れば、何れの木末も落葉して、物さび渡り見えければ、

冬がれに名のみ殘りてかつらやままさきもつたも色ぞ稀なる

須山口と云ふより、富士の麓に到りて、雪をかき分けて、

よそに見しふじの白雪けふ分けぬこゝろの道を神にまかせて

富士のむら山とて、大嶽の麓にはべり、處々に紅葉の殘れるをながめて、

高根には秋なき雪のいろさえてもみぢぞ深きふじのむら山

田子の浦を、はる〴〵とながめやりてよめる。

千さとよりち里に續くふじの根の雪の麓や田子の浦なみ

富士の鳴澤をよめる、

久かたの天の川瀬のこゑなれや雲間にむせぶふじの鳴る澤

三保の入海をながめ侍りて、

浮雲のみほの入うみ見渡せば松の上こす沖津しらなみ

浮島が原をながめ侍れば、松原遠く暮れかゝりて、やう〳〵月すみ上りければ、

立續く松の葉ごしのなみわけて月のみ舟も浮島が原

足柄山を越ゆとてよめる、

足がらの八重やま越えてながむれば心とめよとせきやもるらん

山彦山にて、

こたへする人こそなけれ足びきの山びこ山はあらし吹くなり

先のたび渡りける鞠子川又通るとて、俳諧、

まりこ川又わたる瀬やかへりあし

八幡といへる里に神社侍り、法施の序に、

あづさ弓八幡をこゝにぬかづきぬ春はみなみの山にまちみん

劔澤と云へる處にて、氷を見てよめる、

此ごろは水さびわたるつるぎざは氷りしよりぞ名は光りける

蓑笠の森とて、社頭ましゝけり。暫らく法施はべりて、

天がしたまもらん神のちかひとや爰にき宿るみのかさのもり

二つ橋といへる處を過ぎ侍るとて、

おぼつかな流れも分かぬ川水にかけならべたるふたつ橋哉

宿ニ相州大山寺ニ。寒夜無レ眠。而閑寂之餘。和漢兩篇口號。

簑笠何堪雪後峰。山隈無レ舍倚ニ孤松ニ。可レ憐半夜還レ鄕夢。
一杵安驚古寺鐘。

わが方をしきしのべども夢路さへ通ひかねたる雪のさむしろ

この山を立出で、靈山と云ふ寺に到る、本尊は藥師如來にてまします、俳諧歌をよみて同行の中へ遣はしける。

釋尊のすみかとおもふ靈山に藥師ほとけもあひやどりせり

日向寺といへる山寺に一宿してよめる。

山かげや雪氣の雲に風さえて名のみ日なたと聞も賴まず

熊野堂といへる處へ行きけるに、小野と云ふ里はべり、小町が出生の地にて侍るとなん、里人の語りはべれば、疑はしけれど、

色みえてうつろふと聞く古へのことばの露か小野の淺ぢふ

半澤といへる處に宿りて、發句。

水半ば澤べをわくやうす氷

名にきゝし霞が關をこえて、これかれ歌よみ連歌など言捨てけるに、

吾妻路のかすみの關にとし越ばわれも都にたちぞ歸らん

都にといそぐわれをばよも留めじ霞のせきも春を待つらん

此關を越すぎて、戀が窪といへる處にて、

朽はてぬ名のみ殘れる戀がくぼ今はた訪ふも契ならずや

或人の許にまゐりて遊び侍りけるに。題を探りて三十首歌よみ侍りけるに、深夜寒月、

春あきにあかしなれぬる心ざし深き霜夜の月ぞ知るらん

松雪夕深

嵐さへうづもれはてゝふる雪に松のしるべもなき夕哉

思不言戀

さすが又斯とはえこそいはこすげ下に亂れて詫ぶと知らなん

宗岡と云へる處を通り侍りけるに、夕の煙を見て、

夕けぶりあらそふ暮を見せてけり我が家々のむね岡の宿

堀兼の井見にまかりてよめる、今は高井戸と云ふ。

俤ぞかたるにのこるむさしのや堀かねの井に水はなけれど

昔し誰れ心づくしの名をとめて水なきのべを堀かねの井ぞ

矢瀬の里は、やがて此の續きにて侍り。

里人のやせと云ふ名やほり兼の井に水なきを詫てすむらん

是より入間川にまかりてよめる、

立よりてかげをうつさば入間がは我年波もさかさまにゆけ

此の河に付て樣々の說あり、水逆さに流れ侍るといふ一義も侍る。又里人の家の門、裏にて侍るとなん。水の流るゝ方角案內なきことなれば、何方を上下と定め難し。家々の口は誠に表には侍らず、惣じて申し通はす言葉なども、かへさまなる事ども なり、異形なる風情にて侍り。佐西の觀音寺といへる山伏の坊に至りて、四五日遊覽し侍る間に、死礫ども詠じ侍る中に、

南歸北去一年闌。露宿風飡總不安。贏得行唫乘興詩景。

千峯萬壑雪團々。

黑須川といへる川に、人の鵜つかひ侍るを見て、

岩がねにうつろふ水のくろす川鵜のゐるかげや名に流れけ

ん

故郷の事など思ひ出侍りて、曉まで月に向ひて、

吾郷萬里隔二音容一。一別同遊夢不レ逢。客裡斷腸何時是。

西山月落曉樓鐘。

佐西を立て、武州大塚の十玉が處へまかりけるに、江山幾度か移り變りはべりけん、其の夜のとまりにて、

山攀二峻嶮一海波瀾。到處多其行路難。疎屋終宵風雪底。

凍雞喚レ夢月西寒。

或時大石信濃守といへる武士の舘にゆかり侍りて、まかりて遊び侍るに、庭前に高閣あり、矢倉などを相かねて侍りけるにや。遠景勝れて、數千里の江山眼の前に盡きぬとおもほゆ。あるじ盃を取出して、暮すぐるまで遊覽しけるに、

一閑乘レ興屢登レ樓。遠近江山分二幾州一。落雁叫レ霜風颯々。

白沙翠竹斜陽幽。

十玉が坊にて、人々に二十首歌よませ侍るに、閑庭雪、

跡いとふ庭とてひとのつれなくばとはぬ心のみちもうらみじ

霞妨夢

ふし詫る笹のしのやのたま霞たまさかにだにみる夢もなし

年内待梅

春をまつ心よりさくはつはなをいつか冬木の梅にうつさん

別後切戀

消ける玉の行方とけさは見よわかれし君が道しばのつゆ

河越といへる處にいたり、最勝院といふ山伏の處に一兩夜やど

りて、

限りあればけふ分つくす武藏野のさかへもしるき河越の里

此處に、常樂寺といへる時宗の道場はべる、日中の勤め聽聞のために罷りける道に、大井川といへる處にて、

打渡す大井がはらのみなかみに山やあらしの名を宿すらん

この里に月吉と云へる武士の侍り、聊か連歌などたしなみけるとなん。雪の發句を所望し侍りければ、言ひつかはしける。

庭の雪月よしとみる光りかな

これにて百韻興行し侍りけるとなむ。これより武士の館へ罷りける道に、善知鳥坂といへる處にてよめる。

うとふ坂越てくるしき行末を安方となく鳥の音もがな

須黑といへる處に到りて、名にきゝし薄など尋ねてよめる。

旅ならぬ袖もやつれて武藏のやすぐろのすゝき霜に朽にき

又野寺といへる處爰にもはべり、これも鐘の名所なりといふ、此の鐘、古へ國のみだれに依りて、土の底に埋みけるとなん、そのまゝ掘り出さゞりければ、

音にきく野寺をとへば跡ふりてこたふる鐘もなき夕べかな

此あたりに野火留のつかといふ塚あり、けふはな燒きそと詠せしによりて、烽火忽ちに燒止りけるとなむ、夫より此塚をのびどめと名付け侍るよし、國の人申し侍りければ、

わか草の妻もこもらぬ冬されにやがてもかるゝのび留の塚

これを過て、膝折と云へる里に市はべり、暫らく假屋に休みて、例の俳諧を詠じて、同行の人に語り侍る。

商人はいかで立つらんひざ折の市にかつけをうるにぞ有り

家路トイフモノニカケタル詞ナリ

ける

ある處に一宿し侍りけるに、立て侍りける屏風、扇づくしにて侍り、その中に骨ばかり書きたる扇侍りけり、其上に書ておき侍る。

破扇本來非二破扇一。銀錢工有レ飾二丹青一。今何零落只殘レ骨。
見此人間生滅形。

ある僧和韻とて、後日に人の見せ侍りける。

取二破扇一猶見二玉扇一。從候正色又非レ青。雖二今茲殘骨零落一。
豈比二人間八苦形一。

或時旅宿にて、二十首の歌皆々よませけるに、曉更雪。

草も木も我まだ知らぬ種ながら花に明け行くしの〳〵めの雪

雪中鷹狩

ふりまがふ雪の野原にたつ鳥はしらふの鷹に身をや捨てなん

池水鳥

池水につがはぬをしや友とみてかたわれ月のかげに鳴くらん

契二世戀

沈むべき後をもしらでみつせがは水ゐらさじと契るはかなさ

或夜故郷の人を夢に見侍りて、さめて後名殘多かりければ、

客牀夢覺故人歸。空夜悽然獨濕レ衣。不レ識同期其底日。
洛湯千里信音稀。

十玉が坊にて、三十首の歌詠み侍りけるに、冬地儀。

おしなべて草木にかはる色もなし誰かはむつの花とみるら
ん

月前雪

すむ月のみふね靜かに世わたるや千さと晴行く雪の白なみ

浪上千鳥

網人のうけのつな手をよそに見て千鳥も友をひく波ぢかな

初尋緣戀

たよりふく風になびかば初をばなほのめかしつゝいざ試み
ん

同じ宿坊にて、よもすがら爐邊に嘯吟して、

寒燈挑盡夜沈々。獨臥空牀一思不レ禁。爲レ我詩神如レ有レ感。
松風生レ砌助二愁吟一。

雪のあした、ある所の高閣に登りて偶作。

危樓朝上百花鮮。交友無レ憐詩酒筵。此地逍遙似二何處一。
亂山疊嶂雪嬋娟。

十玉が同宿十仙といへる者、連歌に數寄はべりて、切々に興行し侍りけるとなん。或時發句所望しければ、

待つ日のみ山につもりて雪おそし

人々十五首の歌よみ侍りけるに、川千鳥。

はまな川風さえぬらん行き返り氷るをつぐるさよ千鳥かな

懸樋氷

柴折戸はやはや出がてのふゆざれにかけひの水も氷り閉ぢけり

爐火似春

埋み火の灰かき分けて向ふよは春のひかりを手に任せつゝ

依涙顯戀

せき兼る我こゝろ手のなみだゆゑ人のうき名も流れやはせん

山海眺望

わたつ海の波の千里をへだて來て山にも見る目刈らぬ日は無し

旅天歳暮、いつしか引きかへたる式にて、雪月の夜、寒梅に對して偶作。

歳云晩矣若二吾何一。白髮蒼顔愁又加。風雪還如レ慰二旅懷一。

野梅映レ月影横斜。

所澤と云ふ處へ遊覽にまかりけるに、福泉といふ山伏、觀音寺

にて竹筒をとり出しけるに、薯蕷といへる物香に有りけるを見て、俳諧。

野遊びのさかなに山の芋そへてほり求めたる野老澤かな

此の處をすぎて、くめ〳〵川と云ふ處はべり、里の家々には井なども侍らで、只この川を汲みて朝夕用ゐ侍るとなん申しければ、

里人のくめ〳〵川と夕ぐれになりなば水は氷りもぞする

或夜、ちご若衆など隣國より知るよしありて、訪らひ來はべりて、酒宴の隙に二十首の歌すゝめ侍る中に、

樵路雪

をりたかむ心を賤がたのまずば拾ふにたへじ雪のした柴

深夜寒月

更行けばながれぬよはもなき者を氷れる影ぞ人頼めなる

惜歳暮

老のかずそはで春まつ身なりせば何かは年の暮をしたはん

祈不逢戀

つれなしと人をばなどか夕しでの我に靡かぬ神やうらみん

述懐涙

うき身には伴ふ人もうとき世に忘れずそでをとふ涙かな

ある江山を過行きけるに、遠村に鐘のひゞきて、勤めの聲幽かに聞えければ、

西泊東漂分二幾州一。天涯流落屢吟遊。疎鐘遊度野村晩。清梵聲殘江寺秋。

閑緒を慰めんがために、夜坐して十五首の歌よみ侍りけるに、

宿鳥驚雪

月にだに驚く杜の群がらすねぐらの雪に聲さわぐらし

池畔水鳥

あしがもの青羽は霜につれなくて澤べの水草枯れも殘らず

契不來戀

契りしも今はかひなく更過ぎて鐘より後は我ぞねをなく

社頭松

すみよしの神世も遠き言の葉の盡せぬ種や松となるらん

或人、旅天の鄙懐を一絶吟じ侍るべきよし所望しければ、扇に書てつかはしける。

一別長天西又東。殘生蹤跡轉二飄蓬一。傍山臨水勞二吟歩一。

詩腸辛酸難レ得レ工。

これかれ爐下に集りて閑吟のついでに、野徑乾草、
かげろふのをゝ〳〵多枯れ見渡せばあるか無きかの雪のした草

從門歸戀
うしつらし眞葛に閉る松のかど跡吹き送るそでのおひ風

鶴翺天
澤べより雲井に昇るあしたづの聲も知られて高き空かな

舊里の音信もなきことを述懷して、徒然のあまりに、寒梅を尋ねにまかりて、ある夕暮月に乘じて。
冷衣歩レ月出ニ寒村一。幽處探レ梅風雪昏。鄕信不レ臻春信到。
臘前惆悵憶ニ中原一。

武州大塚といへる處に住み侍りける時、近衛前關白殿下より、

初めて御書到來し侍り、此を開きて、一度は喜び、一度は戀慕の憂ひに沈みて、
從ニ兼レ君別一始看レ書。異國天涯千里餘。忽憶ニ歸期一淚先落。
待レ春遊子數ニ居諸一。
連日雪いたく降り侍りければ、野遊の興さへかなひ侍らで、いとゞ都の事ども思ひやりて、
向來投レ錫掩ニ幽扉一。平野陰崖片雪飛。想見舊座殘臘底。
記ニ春草木一記ニ吾非一。
越年の式、右にいへる如く、ためしなき有樣どもなり、さるから營む事侍らぬのみ、心安くなりけり。早梅を翫びて、春の至れる事を覺え侍るばかりなり。
歲晏無レ營旅客情。在ニ身寒餓一憶ニ華京一。柴扉半掩夜來雪。

一點梅花使ニ我驚一。

焚火のもとにて、十五首の歌よみ侍りけるに、疎屋聞霰。

ぬる玉は又もかよはで夜もすがら閨もるあられ枕もるなり

寄琴戀

ひく琴に我音をそへてたぐへやる風は心のまつよりぞ吹く

寄夢戀

人しれぬ枕のしたの海河にかけてかひなき夢のうき橋

濱邊旅泊

夢ぞなきもしほの草の枕より跡より波のあらき濱べは

老後懷舊

見し人のなきはつもりのうらめしく殘るかひなき老の波哉

ある時、故郷にあまた侍る連枝の事など思ひやりて、

雲路隔レ蹤鴻雁行。他郷何耐想ニ家郷一。暗香吹斷故園雪。

唯有ニ梅花一似ニ洛陽一。

春色やうやく搖き、何處も風まち送れる日、その興多く侍れども、更に詩人墨客の、是を賞する類ひ侍らぬことのみ念なくて、

邊塞曾無ニ風騷人一。窓梅牆柳獨其春。爲レ誰黃鳥出ニ幽谷一。

淑氣迎レ晴一曲新。

これも、骨肉の事ともゆかしく思ひやりて、

野水海漂鴻雁影。天風頻動春令枝。春候其會知ニ歸路一。

舊里山花落後時。

五月朔日試筆の歌。

あづまよりけふ立つ春は都にて花さくころぞわれを待えん

今朝雪太降。祝ニ豐年之嘉瑞一。裁ニ短篇一章一矣。

廻國雜記

青陽朔旦日。瑞雪示豐年。料識萬邦土。歡娛正快然。

同じ六日、雪聊か融け侍りければ、武藏野に出て若菜をもとめて、

むさしのにけふつむ若菜行末の限りしられぬ世のためしかも

此の野より歸るとて、馬上にて、ある同行に申しかけゝる。

のる駒にむさし鐙をかけぬればさすがに名ある野にも泥まず

或處に罷りて、一兩日すみ侍りけるに、山深き處なれば、鶯も花も未だ春を知らざりければ、

寒鶯幽谷棲吾家。一曲朝來出霧霞。簷外壓枝梅半離雪。

何時乘月見橫斜。

武藏野に出で、酒などのみて遊びけるに、始めて雲雀の揚るを見て、

若草の一もとならぬむさしのにおつる雲雀も床遠ふらん

淺ましげなる田夫の家に一兩日泊りはべりけるに、野孃草席などいひし姿なりければ、感緒に堪へず、口にまかせける。

吾此幽棲似謫居。從渭城別絕音書。淡雲流水隨行處。

自爨黃粱手煮蔬。

旅宿に梅の咲きたりけるを、一枝手折りてよめる。

むめがゝを宿すのみかは春風の都を移すそでとこそ知れ

餘寒ことの外にはべりける朝、鶯のなけるを聞きて、

花故に谷の戸いでし鶯も梅も雪にや冬ごもるらん

武州に山家の勝地侍り、まかりて十日ばかり逍遙し侍りけるに、

ある夜筆に任せ侍りし。

旬此地上ニ遊軒。雲水森然山有レ靈。殘夜無レ眠聽ニ春雨一。
蕭々深院短檠青。

次の夜、雲散じて月いと面白きに、軒近く梅の薫りければ、和漢第三まで獨吟。

まくらとふ梅に旅ねの床もなし
月引　古郷春

山遠くかすむ方より雪きえて

翌日、雨に降りこめられて、野邊の興も叶ひ侍らざりければ、徒然とながめ暮らし、花鶯を友として　口ずさみける。

旅亭春雨日如レ年。坰野逍遙絶ニ往還一。贏得嘯吟戰ニ閑緒一。
黄鸝交レ語問ニ詩筵一。

又の日雨はれて雪になりければ、霞立消えて餘寒甚しく侍りければ、

淡雪のふりさけ見ればあまのはら消えて跡なき朝がすみかな

十玉が方より、紅梅の色こきを始めて見せければ、

こゝろざし深く染めつゝながむれば猶くれなゐの梅ぞ色そふ

彼の老僧扇の賛を所望しはべりき、彼の繪に山路に雲霧を分けはべる行人、橋に行きかゝりたる所。

同遊相引歩徐々。霜霧阻レ山前路虚。獨木橋邊人不レ見。
松間鐘動夕陽初。

同じ心を和にて書き添へ侍りける。

山もとの村の夕ぐれことゝとへばまだ程遠し入あひの鐘

野遊の序に、大石信濃守が館へ招引し侍りて、鞠など興行にて夜に入りければ、二十首の歌をすゝめけるに、

初春霞

かさならぬ春の日數を見せてけりまた一重なる四方の霞は

歸雁幽

霞みつゝしばし姿はほの見えて聲より消ゆるかりの一つら

浦春月

もしほやく浦わの煙つらき名をかすみてかくせ春のよの月

夢中戀

さめてこそ思ひの種となりにけれかりそめふしの夢の浮橋

後朝戀

かき遣しなみだの床のあさねがみ思ひの筋は我ぞまされる

大石信濃守父の三十三回忌とて、さま〴〵の追修を致しけるに、開き及び侍りければ、小經を花の枝に付けて贈り侍るとて、

散りにしは三そぢ三とせの花の春けふこのもとに問ふを待つらん

武藏野の末に濱崎といへる里侍り、かしこに罷りて、

むさしのを分つゝ行けば濱さきのさとはきけど立つ波もなし

此の程長々住み　れ侍りける旅宿を立て、甲州へ赴き侍りけるに、坊主の殊の外に名殘を惜み侍りければ、暫らく馬を控へてよみ遣はしける。

旅だちてすゝむる駒のあしなみも馴れぬる宿にひく心か

な

かくて甲州に至りぬ。岩殿の明神と申して靈社ましく〳〵けり。
參詣して、歌よみて奉りけり。

あひ難き此いはどのゝかみや知る世々に朽せぬ契り有りと

は

猿橋とて川の底千尋に及びはべる上に、三十餘丈の橋を渡して渡りけり。此橋に種々の說あり、むかし猿の渡しけるなど里人の申し侍りき、さる事ありけるにや信用し難し、この橋の朽損のときは、いづれも國中の猿飼ども集まりて、勸進などして渡し侍るとなん、然あらばその由緒も侍ることあり、處から奇妙なる境地なり。

名のみして呼ぶも聞かぬ猿橋の下にこたふる山川の音

同じ心をあまた詠じ侍りけるに、

谷ふかきそばの岩ほのさるはしは人も木末をわたるとぞ見る

水の月なほ手にうときさるはしや谷はちひろのかげの川瀨に

此處の風景、更に凡景にあらず、頗る神仙逍遙の地とおぼえ侍る。

雲霞漠々渡二長梯一。四顧山川眼レ迷。吟步誤令レ疑レ入レ峽。
溪隈殘月斷猿啼。

同じ國はつかりの里と云へる處を過ぎはべる折節、歸鴈のなきけるを聞きて、

今はとてかすみを分けて歸るさにおぼつかなしやはつかり

の里

柏尾と云へる山寺に一宿し侍りければ、彼の住持の曰く、後の世のため一首を殘し侍るべきよし、頻りに申し侍りければ、立ちながら口に任せて申し遣はしける、かし尾と俗語に申し習はし侍れども、柏尾山にて侍るとなん。

かげたのむ岩もと柏おのづからひと夜假寢に手折りてぞしく

花藏坊と云へる處に、十日ばかりとゞまりけるに、武田刑部大輔禮に來り侍りき、盃とり出して暫く遊覽し侍りければ、愚詠を所望しければ、翌日使を遣はすついでに、

消えのこる雪の白根を花とみてかひある山の春のいろ哉

又この國の鹽の山、さしでの磯とて、並びたる名所侍りければ、

春の色も今ひとしほの山見ればはかげさし出の磯ぞかすめる

この二首を遣はし侍りき、其後さしでの磯にて、鶯を聞てよめる。

はる日かげさして急ぐかしほの山たるひとけてや鶯のなく

宿坊の軒に梅いと面白くさき薫りて、月影朧なる夜もすがら、假寢の夢も忘れ果てゝ、

梅かをり月かすむ夜の旅まくら夢にみやこを何か忍ばん

武田が館に梅あまた侍り。宿所への事は憚りありとて、祖母の比丘尼の寺へ招引し侍りて、樣々の風情をこらし侍りき、このあたりに菊島といへる名所はべり、一首所望し侍りしかば、

さき匂ふ花のはる風うらやみて秋をよそにも菊が島かな

けふの道に、笛吹川と云へる川はべり、馬上にてよめる。

はる風に岸なる竹も音そへぬふえふき川の波の調べに

同じつゞきに、花鳥の里と云へる處をすぎ侍るとて、

色にそみ聲にめでつゝやすらひて永き日暮す花どりの里

是より七覺山と云へる靈地に登山す、衆徒山伏兩庭歴々と住める處なり、曉更に至るまで、管絃酒宴興をつくし侍りき、宿坊の花やう〳〵さき初めけるを見て、

つぼみ枝の花も折しるこの山になゝつの悟りひらきてしがな

翌日この山を出で、同じ國吉田と云へる處に到る。富士の麓にて侍りけり、今夜は二月十五日、月いと霞みて、ふじの根さだかならざりければ、

きさらぎや今宵の月の影ながらふじもかすみに雲がくれし

て

片柳と云へる處を通るとて、

ひとしほのみどりに靡く糸はげにはるのくるてふ片やなぎ

哉

道すがら故郷の花を思ひやりて、

あづま路の春をしたはゞ故郷のはなは我をやうらみはてまし

すくもの渡しといへる處を行き侍りける、朝霞いと深くなびき合へるを見て、

里人のよはにたく火の煙かとすくもの渡りけさ霞みつゝ

三月二日。利根川、青柳、佐貫の庄、舘林、ちづか、植野の宿

などうち過ぎて佐野にてよめる。

古への跡をば遠くへだてきて霞かゝれる佐野の舟ばし

宇都宮慈心院と云へる聖道所に、花あまた侍り、人々誘ひ侍りければ、社参のついでに門外まで見やり侍りけり、いと尋常なる住居にて侍り、兒などのはづれ見えければ、ゆかしく覺えて、歸りていひ遣はしける。

立よりてみる程もなき木のもとの心にかゝるはなのしらゆき

このあたりの人、百韻興行して、社頭に奉納すべき宿願ありて、發句を乞ひ侍りければ、

ちらぬ間はあらしや花の宮木もり

宇都宮を立ちて行く道に、鹽屋と云へる處侍り、暮れ行くまゝに、里々の烟立つを見て、

旅ごろもうらぶれて行く鹽の屋に烟さびしき夕がすみ哉

狐川といへる里に行きくれてよめる。

里人のともす火かげもくるゝ夜によそ目あやしききつね川哉

朽木の柳といへる處に到る。古への柳は朽果てゝ、その跡に植ゑつぎたるさへ、又苔に埋もれて朽ちにければ、

みちのくの朽木の柳いとたえてこけの衣にみどりをぞ假る

是より稲澤の里、黒川、餘笹川など打過ぎて、白河二所の關にいたりければ、幾本ともなく山櫻咲滿ちて、心も言葉も及びはべらず、暫らく花の蔭に休みて、

春はたゞ花にもらせよ白かはのせきとめずとも過ぎん者か

は

同じ心を、あまたよみ侍りける中に、

とめずとも返らん者かおとにのみ聞きしにこゆる白川のせき

白川のせきの並木のやまざくら花にゆるすな風の通ひぢ

白川入道妻におくれて、なげきの中に侍るとて、禮にも來侍らず、孫をもてさま〳〵禮義をいたし侍りき、彼の入道、歌道數寄のよし傳へきゝ侍りければ、いひ遣はしける。

立よるも一樹のかげの契りとて散にしはなの跡も懷かし

こゝを立て、八槻といへる處へ趣き侍りける道に、うたゝねの森といひて、いと木深き林侍り、やう〳〵花の散り過ぎけるを見て、

ちる花をたゞ一時のゆめとみて風に驚くうたゝねの杜

かくて人忘れずの山といへる處にて、矢つぎの別當坊に一兩夜泊りて、

梓ゆみ矢つぎの里のさくらがり花にひかれて送るはる哉

是より田村といへる處に罷りける道すがら、樣々の名所ども多かりけり。いひ捨てし歌など記すに及ばず、淺香の沼にて、

花がつみかつぞうつろふ下水の淺香の沼は春ふかくして

淺香山にてよめる。

ちり積る花にせかれて淺か山淺くは見えぬ山の井の水

阿武隈川をすぎ侍るとて、

かくしつゝ故郷人にいつかさて逢隈がはの逢瀬にはせむ

鹽の山といふ處は山中にて侍る、是より海邊へは十里許り侍る